

泉南市遺跡群発掘調査報告書 XXVIII

泉南市文化財調査報告書 第五十一集

2011. 3

泉南市教育委員会

序 文

私たちのまち、泉南市は古代の行政区画である和泉国でも南部に位置しており一年を通して温暖な気候条件を有し、海の幸豊かな大阪湾、緑豊かな和泉山脈に囲まれるなど豊かな自然環境に恵まれています。このため、市内には先人たちの営みによって残された数多くの遺跡が存在しています。

しかし、関西国際空港建設開始から20年以上が経過し、それらに伴う周辺の様々な開発等による都市化によって、これらの貴重な歴史遺産が破壊の危機にさらされていることも事実です。

このような状況のもとで、本市ではこれらを保護し未来に伝えていくという重要な責務を果たすため、緊急発掘調査を随時おこなっており、その成果を公表すべく『泉南市遺跡群発掘調査報告書』を毎年刊行させて頂いております。

特に今年度は、史跡海会寺跡出土遺物が国の重要文化財に指定され15年、同じく来年度は埋蔵文化財センターオープンから15年ともなる年であり、今後より一層充実した文化財行政をおしすすめていく所存であります。

最後になりましたが、調査にご協力頂きました地元土地所有者、近隣住民の皆様、並びに関係諸機関の方々には、深く感謝の意を述べさせていただきますと同時に、今後とも本市の文化財行政により一層のご理解、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成23年3月

泉南市教育委員会
教育長 梶本 邦光

例 言

1. 本書は、泉南市教育委員会が平成 22 年度国庫補助事業として計画し、教育部生涯学習課が実施した泉南市遺跡群の緊急発掘調査事業の報告書である。
2. 調査は、泉南市教育委員会教育部生涯学習課、石橋広和、城野博文を担当者とし、平成 22 年 4 月 1 日に着手し、平成 23 年 3 月 31 日に終了した。なお、本書に掲載している内容は、平成 22 年 1 月 1 日から平成 22 年 12 月 31 日までのものである。
3. 現地調査および整理の実施にあたっては蒲生徹幸、蔵田弘幸、藤野 渉、真鍋紀美子諸君らの協力を得た。
4. 本書の執筆は第 1 章を石橋が、その他の執筆および編集については城野が行った。
5. 現地調査における写真撮影は各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は城野が行った。
6. 調査における出土遺物および図面、写真などの諸記録は、泉南市埋蔵文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを望むものである。

凡 例

1. 各調査区には個別の番号を付した。番号の構成は、「遺跡略称 - 調査年度 - 通し番号」である。遺跡略称は、男里遺跡 - ON、戎畑遺跡 - EB、岡中遺跡 - OK、兎田遺跡 - US、楠畑遺跡 - KS である。調査年度は西暦の上位 2 桁を省略して表記している。
2. 図中の方位は、PL. 1・2 では真北を、各調査区位置図・地形図では国土座標 VI 系にもとづく座標北を、各調査区平面図では磁北をあらわしている。
3. 図版中に示したレベル高は、T.P. + (m) の数値を使用しているが、T.P. + は省略している。
4. 本書で扱う文化財分布図は、大阪府地図情報提供システムにおいて公開されている文化財情報を基に作成し、地図は国土地理院発行の 5 万分の 1 地形図（岸和田）、（粉河）を使用した。（PL. 1）
5. 本書で扱う地形分類図は、豊田兼典氏が作成した。（PL. 2）
6. 遺構名称は、遺構の種類を表すアルファベットと任意の数列の組合せで表記している。本書にて扱う遺構の種類は Pit(p) - ピットである。
7. 遺物実測図の断面は、須恵器 - 黒塗り、瓦 - トーン、その他 - 白抜きのように区分している。
8. 遺物実測図と写真図版において遺物番号は統一している。

目 次

第1章	調査の経過	1
第2章	男里遺跡の調査	
	第1節 既往の調査	8
	第2節 10-1、2、3区の調査	10
	第3節 09-6区の調査	13
第3章	戎畑遺跡の調査	
	第1節 既往の調査	16
	第2節 10-1区の調査	17
第4章	岡中遺跡の調査	
	第1節 既往の調査	18
	第2節 10-1区の調査	19
第5章	兎田遺跡の調査	
	第1節 既往の調査	21
	第2節 10-1区の調査	21
	第3節 10-2区の調査	22
第6章	楠畑遺跡の調査	
	第1節 既往の調査	24
	第2節 10-1区の調査	24
第7章	まとめ	26
報告書抄録		巻末

挿 図 目 次

第1図	試掘調査調査区位置図①	6
第2図	試掘調査調査区位置図②	7
第3図	男里遺跡、戎畑遺跡調査区位置図	8

第4図	男里遺跡 10-1、2、3区地形図	10
第5図	男里遺跡出土遺物	11
第6図	男里遺跡 09-6区地形図	14
第7図	戎畑遺跡 10-1区地形図	16
第8図	岡中遺跡調査区位置図	18
第9図	岡中遺跡 10-1区地形図	19
第10図	兔田遺跡調査区位置図	21
第11図	兔田遺跡 10-1区地形図	21
第12図	兔田遺跡 10-2区地形図	22
第13図	楠畑遺跡調査区位置図	24
第14図	楠畑遺跡 10-1区地形図	24

表 目 次

第1表	平成22年発掘および試掘調査届出一覧表	2
第2表	発掘調査一覧表	3
第3表	試掘調査一覧表	4
第4表	立会調査一覧表	5
第5表	文化財一覧表	28

図 版 目 次

PL.1	泉南地域の文化財
PL.2	泉南地域の地形分類
PL.3	男里遺跡調査区①
PL.4	男里遺跡②、戎畑遺跡、岡中遺跡、兔田遺跡、楠畑遺跡調査区

- PL. 5 試掘調査区
- PL. 6 男里遺跡 10-1、2、3 区①
- PL. 7 男里遺跡 10-1、2、3 区②
- PL. 8 男里遺跡 10-1、2、3 区③
- PL. 9 男里遺跡 09-6 区、戎畑遺跡 10-1 区、岡中遺跡 10-1 区
- PL. 10 兎田遺跡 10-1・2 区、楠畑遺跡 10-1 区
- PL. 11 試掘調査①
- PL. 12 試掘調査②
- PL. 13 出土遺物

泉南市遺跡群発掘調査報告書 XXVIII

第1章 調査の経過

大阪府南部に位置する泉南市は四方を大阪湾、和泉山脈、樫井川、男里川・金熊寺川に囲まれて、山間部から段丘面、沖積地、海岸などすべての地形的条件を備えている。そのため先土器時代から近世に至る様々な遺跡が周知されており、平成22年12月現在92箇所になる。特に多くの遺跡が周知されたのは、関西国際空港建設前後であり、調査件数は増大し、さまざまな調査成果が得られた。約20年が経過し大規模な開発は当時よりは減少したものの、小規模な開発や個人住宅等に伴う調査は連綿と続いており、市域の埋蔵文化財の調査データはいっそう蓄積されるに至っている。平成22年における土木工事に伴う届出件数の状況は、第1表のとおりである。昨年と比べて発掘件数は若干減少したものの試掘は増加しており、ほぼ横ばいの傾向であるといえる。来年度以降もこの傾向は続くものと考えられる。

このような状況のもと発掘調査は第2表のとおり、5遺跡8調査区が行われた。なお、男里遺跡の1調査区については平成21年度未報告分を掲載している。それぞれの遺跡について調査の経過を述べたい。

男里遺跡は、先土器時代から近世まで幅広い時代が確認され、現在の男里地区の他、馬場・樽井・幡代地区にもまたがる市域最大の遺跡である。これまで市域で最も多くの調査が行われており、届出件数も毎年最多である。今年度は遺跡北部の男里集落に隣接した水田地でややまとまった面積の3件の調査が行われ、幡代地区に含まれる遺跡南東端で行われた昨年度未報告分1件の調査と併せて報告している。

戒畑遺跡は、男里遺跡の北部、男里川右岸の沖積段丘上に立地する遺跡である。平成8年度に区画整理に伴う大規模な調査が行われ、平安時代から中世の大集落が確認されている。今年度は、この区画整理地に隣接する遺跡南端部分で1件の調査が行われ、これを報告している。

岡中遺跡は、平成2年度に開発に伴う試掘調査において周知された遺跡である。その後、小規模な調査がほぼ毎年着実に行われてきた。今年度は現岡中集落北部で1件の調査が行われ、これを報告している。

兎田遺跡は、現兎田集落とほぼ重複している。そのため開発はほとんど無いが、個人住宅の建替えに伴う調査を中心にほぼ毎年小規模な調査が行われている。今年度も現兎田集落部分で2件の調査が行われ、これを報告している。

楠畑遺跡は、平成2年度の市域における大規模な分布調査によって周知された遺跡であるが、山間部という遺跡の立地のため、これまでまったく調査は行われていなかったが、今年度初めて1件の調査が行われ、これを報告している。

一方、範囲外の試掘調査件数は第3表のとおりである。昨年度は減少したが、再び増加に転じている。これは、経済情勢から一時期停滞していた開発が再び増加傾向にあるもので、来年度以降景気回復により再び調査の増加が続くものと考えられる。(第1、2図、PL.11、12)

第1表 平成22年発掘および試掘調査届出一覧表

平成22年12月31日現在

年 月	発 掘		試 掘		合 計	
	件 数	面積 (㎡)	件 数	面積 (㎡)	件 数	面積 (㎡)
22年1月	1	346.58	1	5,272.69	2	5,619.27
2月	2	10,224.33	1	499.24	3	10,723.57
3月	5	2,201.72	1	584.51	6	2,786.23
4月	5	8,060.76	2	13,300.58	7	21,361.34
5月	3	362.09	2	1,911.36	5	2,273.45
6月	13	6,866.70	2	7,612.98	15	14,479.68
7月	5	726.41	5	10,407.90	10	11,134.31
8月	1	735.54	0	0.00	1	735.54
9月	0	0.00	0	0.00	0	0.00
10月	1	12.68	0	0.00	1	12.68
11月	1	56.35	4	19,383.61	5	19,439.96
12月	4	639.45	0	0.00	4	639.45
合 計	41	30,232.61	18	58,972.87	59	89,205.48

第2表 発掘調査一覧表

平成22年12月31日現在

No.	遺跡名	地区名	位置	面積 (㎡)	用途	調査年月	備考
1	男里遺跡	10-1区	男里	2537.14	共同住宅、 宅地造成	22年7月	本書掲載(確認調査) 22-9
2	男里遺跡	10-2区	男里	1175.73	共同住宅、 宅地造成	22年7月	同上(確認調査) 22-10
3	男里遺跡	10-3区	男里	1144.72	共同住宅、 宅地造成	22年7月	同上(確認調査) 22-11
4	男里遺跡	09-6区	馬場	485.67	個人住宅	22年3月	同上 21-44
5	戎畑遺跡	10-1区	樽井	735.54	宅地造成	22年8月	同上(確認調査) 22-27
6	岡中遺跡	10-1区	信達岡中	544.01	個人住宅	22年6月	同上 21-46
7	兔田遺跡	10-1区	兔田	399.81	個人住宅	22年4月	同上 22-1
8	兔田遺跡	10-2区	兔田	285.78	個人住宅	22年8月	同上 22-25
9	楠畑遺跡	10-1区	信達楠畑	922.00	電話通信	22年6月	同上(確認調査) 21-42

第3表 試掘調査一覧表

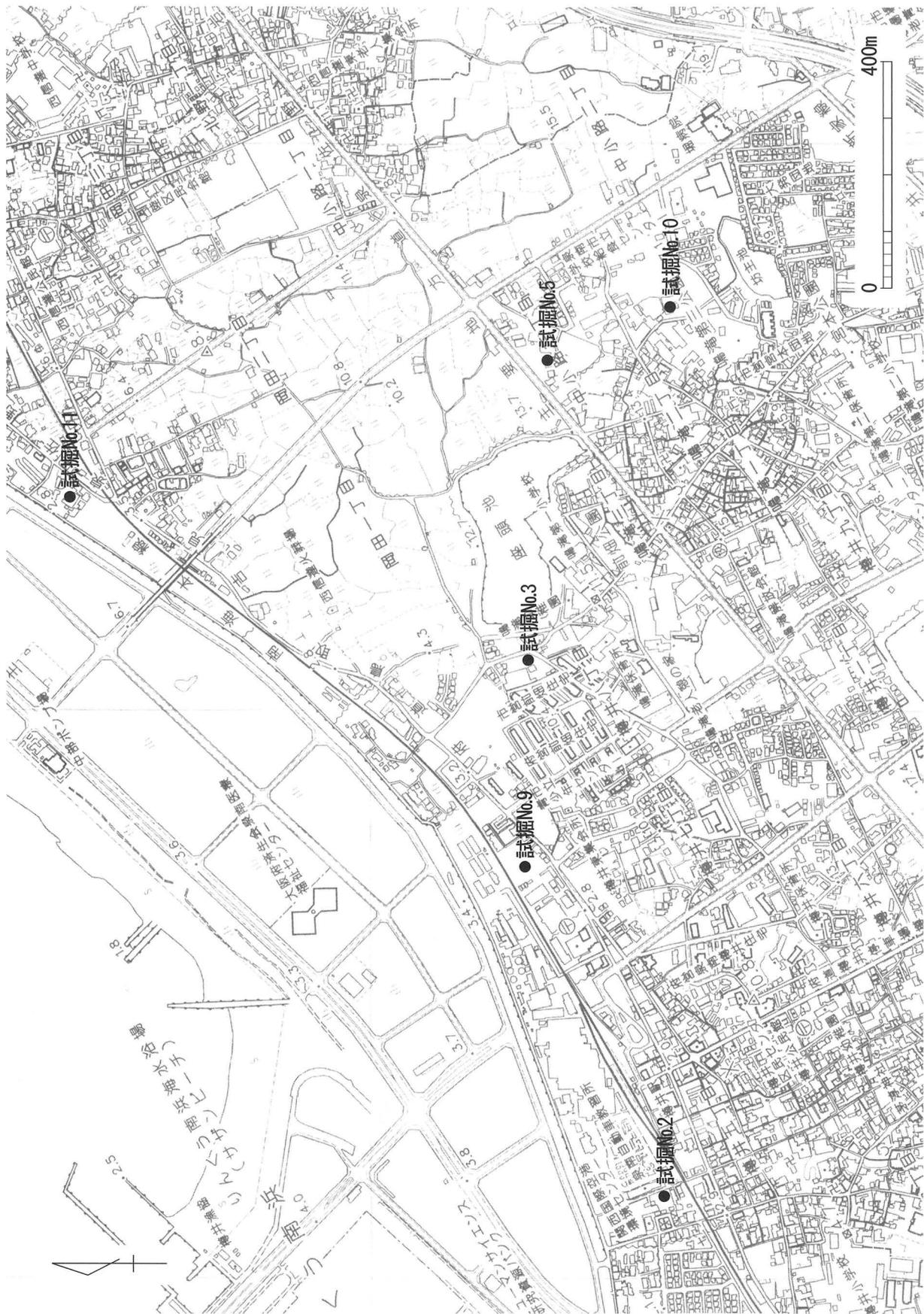
平成22年12月31日現在

No.	遺跡名	位置	面積 (㎡)	用途	調査年月日	備考
1	範囲外	信達牧野	1,712.68	宅地造成	22年1月18日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
2	範囲外	樽井	867.57	事務所	22年2月16日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
3	範囲外	樽井	499.24	共同住宅	22年3月16日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
4	範囲外	馬場	5,272.69	宅地造成	22年3月26日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
5	範囲外	中小路	12,948.10	店舗	22年5月28日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
6	範囲外	信達牧野	443.19	共同住宅	22年6月30日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
7	範囲外	樽井 馬場	4,915.41	宅地造成	22年7月22日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
8	範囲外	馬場	399.72	宅地造成	22年7月23日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
9	範囲外	樽井	3,638.35	宅地造成	22年9月8日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
10	範囲外	信達市場	932.48	宅地造成	22年10月4日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
11	範囲外	岡田	921.66	宅地造成	22年11月25日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
12	範囲外	信達岡中	1,201.36	障害者ケア ホーム	22年12月1日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。

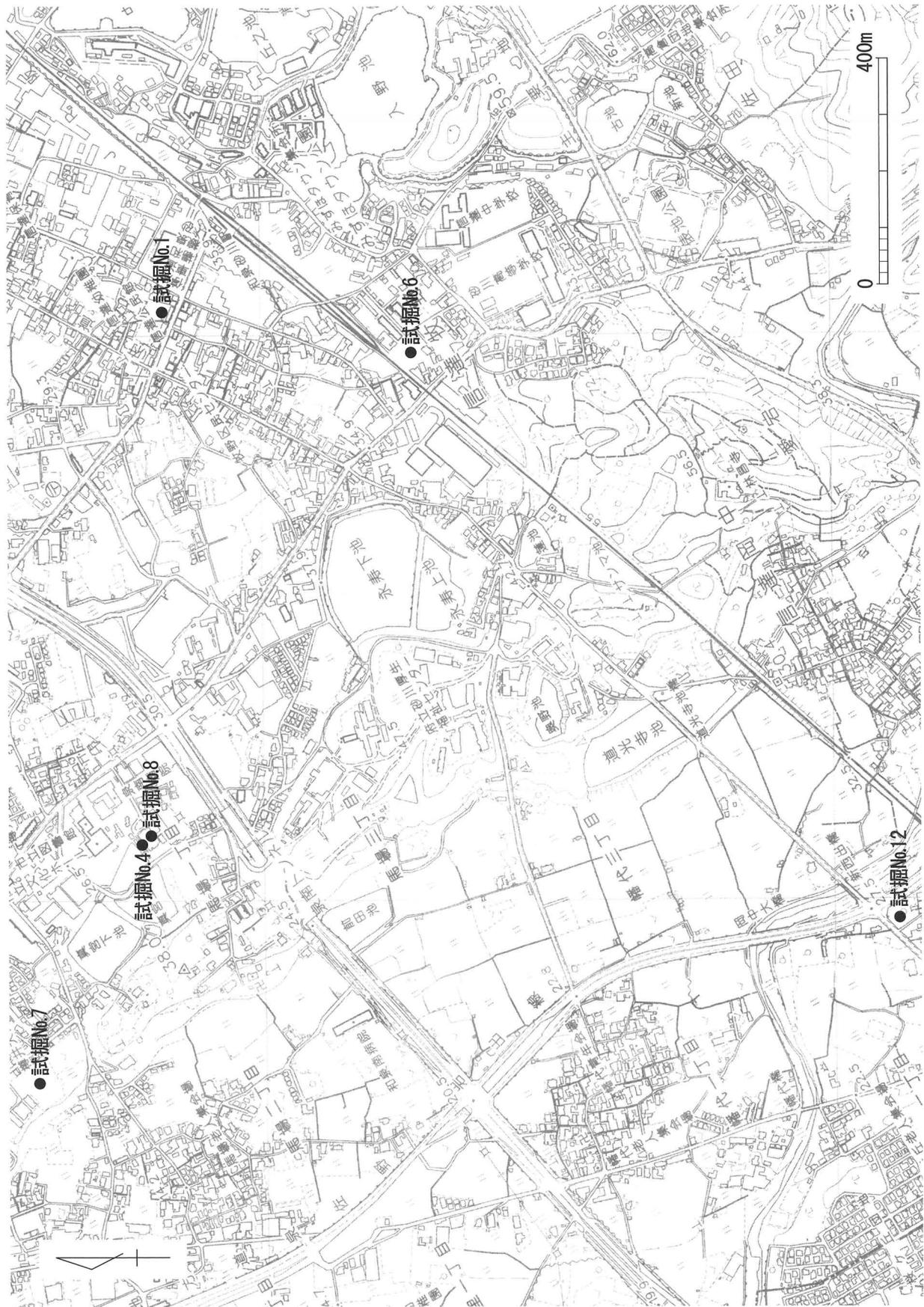
第4表 立会調査一覧表

平成22年12月31日現在

No.	遺跡名	位置	面積(m ²)	用途	調査年月日	備考
1	男里遺跡	男里	507.90	ガス管理設	22年1月18日 ～2月10日	中世の瓦等を採集した。 (第5図、PL.13)
2	男里遺跡	男里	134.00	水路改修 道路拡幅	22年3月29日 ～4月7日	遺構・遺物は確認されなかった。
3	男里遺跡	男里	224.33	個人住宅	22年4月7日	遺構・遺物は確認されなかった。
4	男里遺跡	樽井	6,248.69	店舗	22年5月10日	遺構・遺物は確認されなかった。
5	海宮宮池遺跡	信達大苗代	1,076.26	地下埋設 物調査	22年5月27日 ～6月24日	遺構・遺物は確認されなかった。
6	中小路遺跡	信達大苗代	130.24	個人住宅	22年8月2日	遺構・遺物は確認されなかった。
7	北野遺跡	信達大苗代	143.78	個人住宅	22年8月2日	遺構・遺物は確認されなかった。
8	北野遺跡	信達大苗代	133.53	個人住宅	22年8月2日	遺構・遺物は確認されなかった。
9	北野遺跡	信達大苗代	127.80	個人住宅	22年8月2日	遺構・遺物は確認されなかった。
10	男里遺跡	男里	61.50	ガス管理設	22年8月3日 ～6日	遺構・遺物は確認されなかった。
11	男里遺跡	男里	16.84	ガス管理設	22年8月19日 ～20日	遺構・遺物は確認されなかった。
12	中小路遺跡	信達大苗代	114.18	個人住宅	22年9月22日	遺構・遺物は確認されなかった。
13	北野遺跡	信達大苗代	157.57	個人住宅	22年9月22日	遺構・遺物は確認されなかった。
14	男里遺跡	樽井	165.00	下水道	22年11月2日 ～5日	遺構・遺物は確認されなかった。
15	男里遺跡	樽井	12.68	看板設置	22年12月6日	遺構・遺物は確認されなかった。
16	戎畑遺跡	樽井	56.35	ガス管理設	22年12月8日 ～9日	遺構・遺物は確認されなかった。
17	男里遺跡	男里	132.12	看板設置	22年12月22日	遺構・遺物は確認されなかった。



第1図 試掘調査調査区位置図①



第2図 試掘調査調査区位置図②

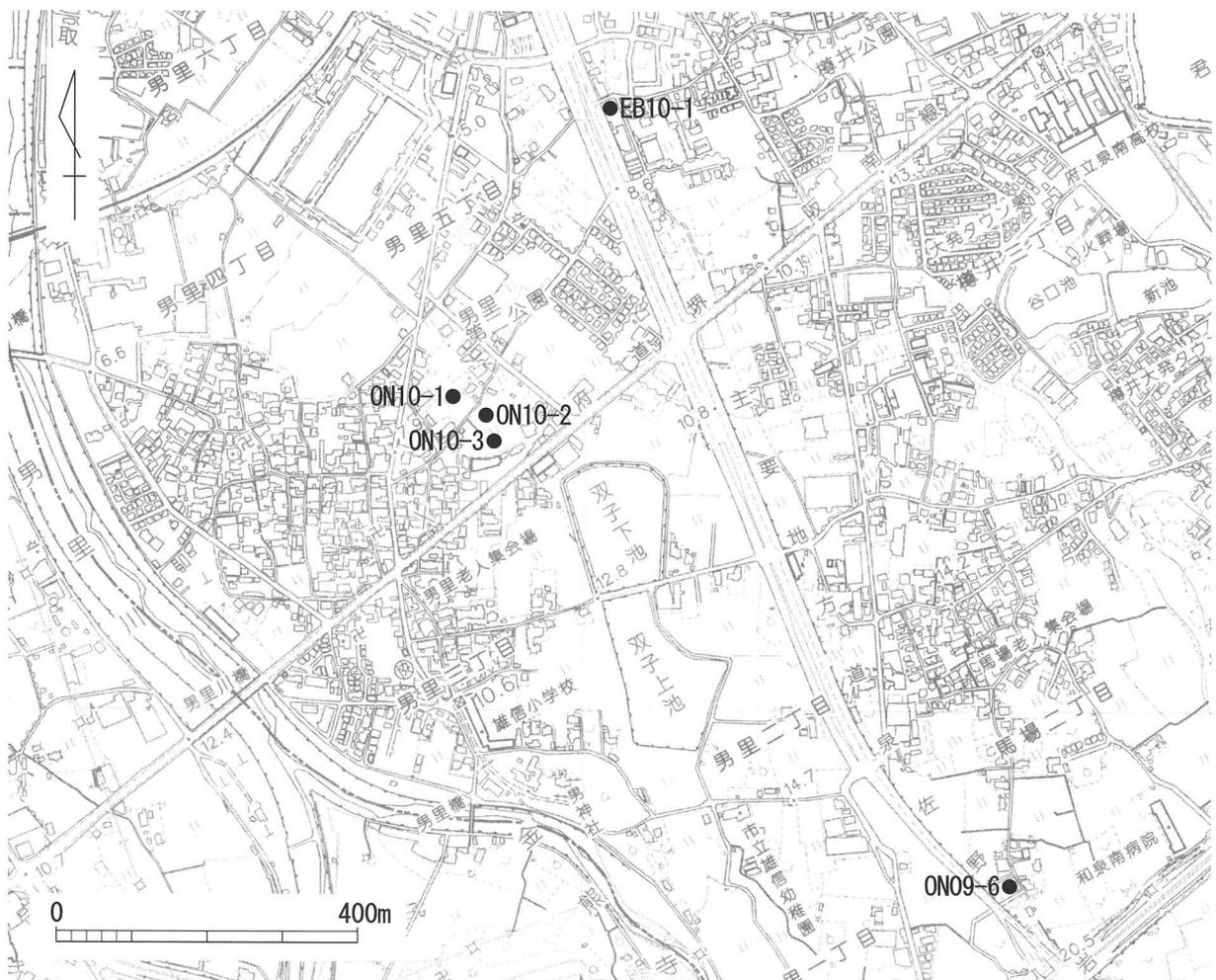
第2章 男里遺跡の調査

第1節 既往の調査 (PL. 1、2)

男里遺跡は市域平野部の北西端に位置し、男里川右岸に形成された沖積地上に展開する旧石器時代から近世に至る複合遺跡である。

地形的には、遺跡中央に位置する金熊寺川旧河道によって形成された氾濫原を主とし、氾濫原東縁に沖積段丘が、さらに遺跡西縁を流れる現男里川河道に沿って自然堤防が発達している。遺跡中央に位置する双子池は旧河道の痕跡とされ、南北2つの溜池の間を「信長街道」^⑨が横断する。北に位置する双子下池は13世紀以降の築造^⑩、上池については17世紀代の築造、20世紀前半の拡大を経て現在の姿になったものと考えられている^⑪。現在沖積段丘上には馬場集落があり、自然堤防上には男里集落が立地する。一方、氾濫原は主として耕作地として利用されてきたが、近年氾濫原と段丘との境界を縫うように大規模な府道が建設されたことで、周辺の景観も大きく様変わりしつつある。

男里遺跡では昭和50年代以降、本市教育委員会をはじめとして、大阪府教育委員会や財団法人大阪府文化財センター等による発掘調査が着実に実施されており、これまでに数多くの成果が蓄積され



第3図 男里遺跡、戒畑遺跡調査区位置図

てきた。以下にその概要を述べる。

縄文時代後期以前の資料は採集品や二次移動を受けたことが明らかなものに限られる。旧石器時代のナイフ形石器^⑧が双子下池より採集され、遺跡南東部より縄文時代中期末から後期初頭の遺物が出土^⑨するが、いずれも遺構に伴うものではなく詳細は明らかでない。晩期には双子池北方において長原式併行期のピット^⑩、遺跡北西縁から北縁部において滋賀里Ⅲ・Ⅳ式期の溝^⑪や谷^⑫、遺跡北西部や双子上池において流路^⑬が確認されている。滋賀里期の遺物にはサヌカイト原礫やチップ、石棒なども含まれることから、近隣に集落が存在する可能性が高い。後期から晩期には遺跡中央から北西部、沓瀬原に属する地点に活動の中心が求められる。双子上池堤体部の調査では長原式期と弥生時代前期の土器が同一の包含層より出土している^⑭。

弥生時代前期には双子池南方に遺跡が展開するものと推定されるものの、未だ明確ではない。中期前葉には遺跡北西縁部、上述した谷の埋土上層に遺物が含まれていることから、谷の南東側に集落が求められる。中期中葉から後葉には遺跡南東部の沖積段丘面上において、30数棟の竪穴住居、掘立柱建物や方形周溝墓、木棺墓などからなる集落が出現する^⑮。集落の西側には自然流路を利用した大溝が存在し、絵画土器を含む多量の遺物が出土している。大溝や地形的な条件から集落は南北200m、東西100mの範囲に展開するものと考えられる。遺物はⅣ様式のもの为主体を占め、時期的に限定された集落といえる。集落の北西約500mに位置する双子下池堤体部の調査において当該期のまとまった資料が知られるほか^⑯、近年は遺跡南東部においても新たな資料の獲得^⑰が相次いでいる。

庄内併行期から布留式期には双子池内部を南北に縦断する流路および流路東岸に展開する集落が確認されている。集落は方形竪穴住居^⑱や掘立柱建物、井戸^⑲よりなるが、その広がりについては明瞭でない。続く古墳時代中期に属する遺構や遺物は今のところ未確認である。後期には遺跡北西縁部の沓瀬原上において竪穴住居^⑳が確認されているほか、遺跡中央部の自然堤防上において6世紀後半から7世紀前半と考えられる小石室が確認されている^㉑。

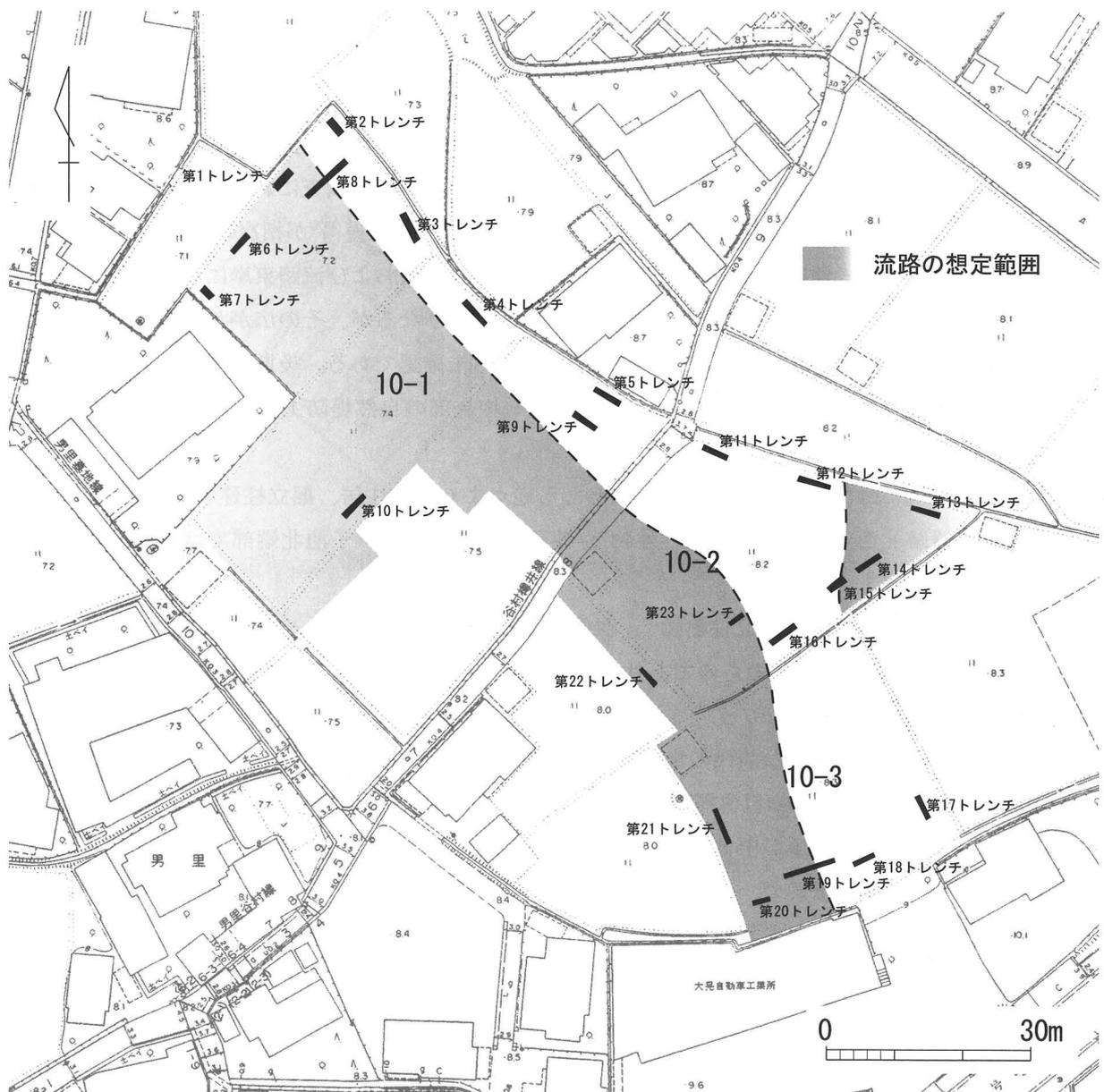
飛鳥・奈良時代には、双子池の東西両岸にあたる地点より竪穴住居、掘立柱建物、廃棄土坑など^㉒が確認され、遺跡北西部において掘立柱建物^㉓が確認される。また双子池北端部ではしがらみを備えた流路^㉔が確認されている。

平安時代には双子池西側に掘立柱建物^㉕、双子池北東にも掘立柱建物^㉖や廃棄土坑^㉗などが確認される。いずれも10世紀後半代のものであり、これらに少し遅れて北西部において掘立柱建物よりなる集落^㉘が出現する。

平安時代末から鎌倉時代には前代の集落域に加えて、遺跡南東部にあたる現馬場集落南端においても集落が現れる^㉙。遺構や遺物包含層の分布によれば同時期に複数集落が併存していたことが確実と見え、現在みられる各集落域が中世に遡り得ることを示唆するものといえる。またこれら中世集落の周辺では瓦類の出土が顕著^㉚で、遺跡南東部では小字より「安粮寺」の存在が想定されており、同様に現男里集落南西部においても瓦類が多く出土^㉛することから、現在の光平寺に連なる可能性が高いものと考えられている。光平寺は12世紀後半の創建の後、14世紀に至るまで屋瓦の補修を伴う維持管理がなされつつ、15世紀代に何らかの伽藍縮小の動きがあったものと推測される。未だ明確な寺院遺構は未確認であるが、今年度現在の光平寺境内の隣接地点において行われた立会調査によって中世の瓦が少量ではあるが確認されており、中世光平寺の寺域を知る手がかりが得られている。(第5図、

PL. 13) 遺跡南東部の中世集落は、現馬場集落南端周辺に展開する一群と、より南方に展開する一群[◎]が知られ、後者では12世紀代の鍛冶炉等が確認されるものの長くは続かず、13世紀代には廃絶している。前者においても13～14世紀代に掘立柱建物や井戸、土坑等による集落が存在するも、程なくして築かれた大規模な溝によって遺構が破壊されている[◎]。新たな耕地開発に伴い集落域そのものは北に移動し、現在の馬場集落と重複する地点へと移動したものと予測されるのである。こうした中世後半を画期とする集落の動向はいわゆる集村化現象として捉えることが可能であり、市内の遺跡においても、いくつかの例[◎]を挙げることができる。以降、これらの集落は伝統的景観を形成しつつ、現在へと連なっていく。

第2節 10-1、2、3区の調査



第4図 男里遺跡10-1、2、3区地形図

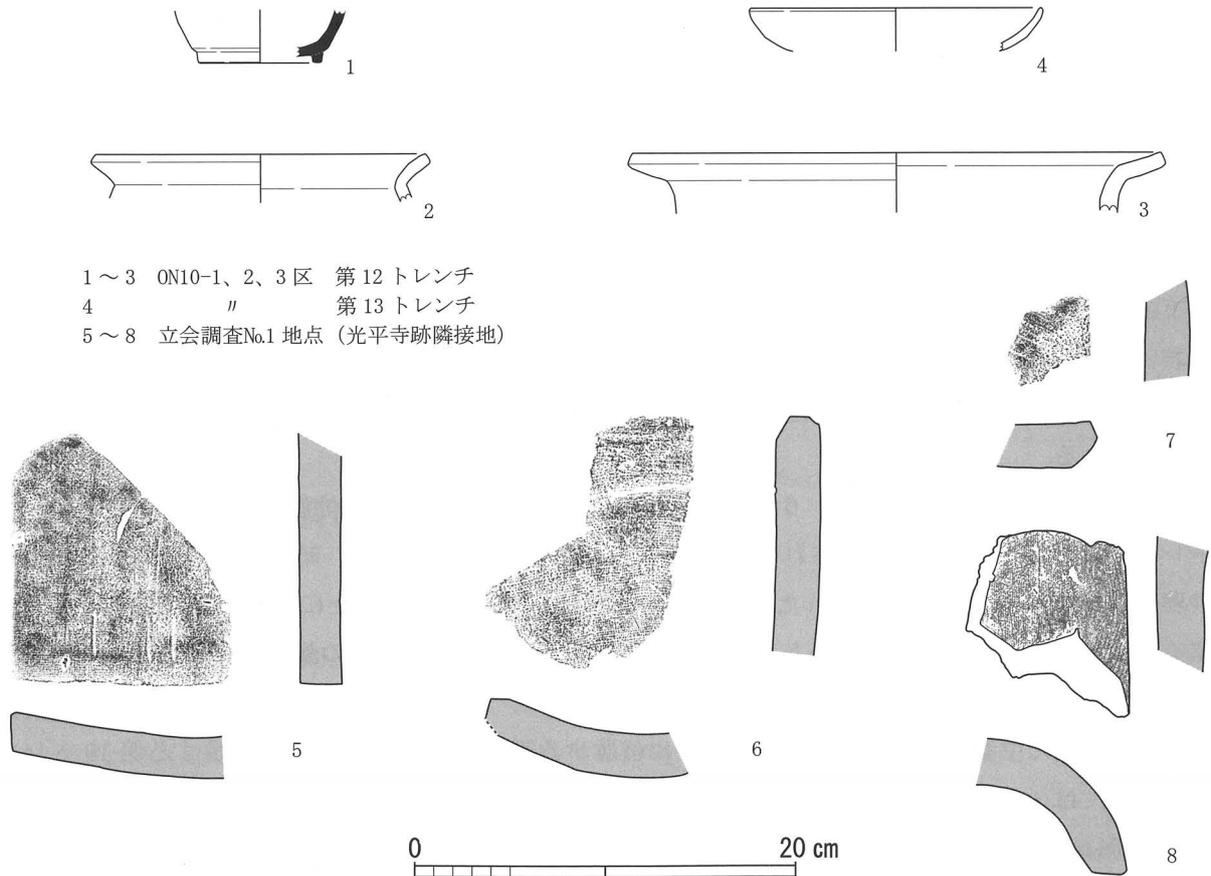
1. 位置 (第3、4図)

本調査区はそれぞれ別件の届出に基づいて行われた調査ではあるが、便宜上、本書では同一の調査区として扱うものとする。

調査区は遺跡の中央北端にあって、府道堺阪南線「男里北」交差点より西約80mの地点である。北端に10-1区が位置し、南側の市道を挟んで2、3区が南北に隣接する。双子下池北縁より北西約150mに位置し、現男里集落の北東端に接する耕作地帯に含まれる地点であるが、近年は周辺での店舗や集合住宅等の建設が進んだため、景観が大きく様変わりしつつある。地形的には旧河道もしくは沖積段丘に属するものと考えられる。

現集落の近接地であること、さらには近年の開発の増加に伴って周辺では数多くの調査が行われている。これまでのところ縄文時代後期～晩期、古墳時代後期、中世といった3時期の遺構、遺物が多く確認されている。調査区北東隣接地において、詳細は不明ながらも滋賀里Ⅲ・Ⅳ式期に属する縄文土器が多量に出土している^⑤。また調査区の東から南東に位置する95-1区では突帯文期を中心とする集落^⑥が、96-6区においても突帯文期の資料^⑦が確認されている。滋賀里期の遺物は量的にもまとまった資料であることから、周辺には95-1区の集落をさらに遡る時期の集落が存在する可能性が高いものと考えられる。

調査区の東約60mに位置する92-1区では古墳時代後期の溝^⑧が、南西約50m、府道堺阪南線沿いの地点においては小石室^⑨が確認されている。集落や生産に直接結びつく遺構は未確認ではあるが、



1～3 ON10-1、2、3区 第12トレンチ
4 " 第13トレンチ
5～8 立会調査No.1地点 (光平寺跡隣接地)

第5図 男里遺跡出土遺物

周辺が当該期の活動範囲の一面をなすことは間違いのないところであろう。

調査区南西方向に位置する 89-7 区、89-8 区、96-5 区、98-7 区などにおいて中世の遺構が確認されている^⑧。これらは現集落の初源を示すものである可能性が高く、さらに南西約 300 m に位置する光平寺跡との関連が伺えるものであるといえる。また地形的にみて旧河道に起因する水成堆積による砂礫が確認された調査区として 88-16 区、04-1 区、02-6 区、93-3 区、03-1 区などが挙げられ^⑧、旧地形の詳細が明らかとなりつつある。また先にみた調査区北東隣接地における調査においては礫の堆積より 5 世紀代の遺物が出土している^⑧。

現況は休耕地である。現況高は 7.2 ～ 8.2 m を測り、南から北へと緩やかに傾斜している。調査では調査区の北東から南西への縁辺部分を中心として全 23 ヲ所のトレンチを設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 3、6～8)

調査区全体が耕作地であったことから、確認された層序は概ね共通するものであった。基本層序として耕作土である灰黒色土 (1 層、約 20 cm) および床土である橙色混じり灰色砂質土 (2a 層、約 10 cm) や暗橙色～黄灰色砂質土 (2b 層、約 10 cm) が広く存在し、さらに旧耕作土層である暗黄色混じり灰褐色砂質土 (3a 層、約 20 cm)、淡灰褐色土～暗黄灰色砂質土 (3b 層、約 20 cm) へと続く。調査区中央付近ではさらに複数の旧耕作土が存在するが、相互に大きな差異は認められない。旧耕作土以下の状況はトレンチによってかなりのばらつきが存在することが確かめられた。

調査区北西縁に沿った第 2、3、4、5、9、11、12、17、18 の各トレンチにおいては地山が確認された。旧耕作土層直下、もしくは褐灰色～淡暗褐色を呈する砂質土やシルト (7 層、約 20 ～ 30 cm) などの堆積を経て、地山である灰褐色混じりにぶい黄褐色砂質シルトへと至る。上面の標高 6.4 ～ 7.7 m を測り、調査区の南から北へと緩やかに傾斜するものである。地山上面では、第 12 トレンチにおいて遺構が確認された。

7 層は調査区の中央から南東部に位置する第 5、9、11、12、13、14、15、17、22、23 の各トレンチにおいて認められる。地点により若干のバリエーションが認められるものの、ほぼ同一の層位と捉えてよいものと考えられる。第 12 トレンチでは古代の遺物が少量出土している。第 5、17 トレンチにおいては旧耕作土層と 7 層との間に褐灰色～黄灰色を呈する砂質土～シルト (6a 層) や暗灰褐色砂質シルトなどが存在するほか、第 16 トレンチでは地山直上に自然堆積と考えられる淡黄灰色シルトが認められる。

調査区北縁部に位置する第 1、6、7 トレンチや、中央から南端部に位置する第 13、14、20 ～ 23 トレンチにおいては地山は確認されず、旧耕作土以下、灰褐色や暗灰色、暗褐色などを呈する粘土、砂礫～砂などの水成層が確認された。第 13、14 トレンチでは、砂礫直上に灰褐色や黄褐色砂質土が厚く堆積するほか、第 1、6、7 トレンチでは整地層と捉えられる粘性の強い黄灰色系土 (5 層、約 20 cm) が存在する。

調査区北東に位置する第 8 トレンチ、中央に位置する第 15 トレンチ、南西に位置する第 19 トレンチにおいては、これら水成層と地山との境界が確認された。第 8、19 トレンチでは西方向へ、第 15 トレンチにおいては東方向へと地山が急激に傾斜するもので、第 8 トレンチ西端部を深掘したところ、最下層である暗灰色粘土が 1.2 m 以上にわたって続くことが確認できた。他のトレンチの状況を

合せて考えると、いずれも大規模な流路もしくは谷地形の肩部であると考えられるもので、第19トレンチより北上し、第23トレンチ付近で緩やかに北西へ向きを変え、第8トレンチへ達し、西に大きく広がるものと、第15トレンチから北東方向へと進み、東へ広がる2条の流路を復元することが可能であり、安定面については流路に挟まれた形で、調査区南端より北西方向へと扇状に広がるものと想定される。流路の埋没時期は、一部を除き遺物が出土しなかったため不明と言わざるを得ないが、流路内部にあたる第13、14トレンチに包含層の可能性が強い7層が確認されることから、古代以前には埋没していたものと考えられる。

3. 遺構 (PL. 3、7)

第12トレンチにおいてピットが6基確認された。ピット1～3は直径15～20cmの円形を呈し、確認面よりの深さ10～25cmを測る。埋土は暗褐色シルトであり、土師器微細片を含むが観察不能であり、詳細は不明である。若干規模にばらつきがあるものの、南東から北西方向への柱列と捉える事が可能である。柱間は1.1～1.3mを測る。ピット4～6は長径20～30cm、短径20cmを測る楕円形を呈する。確認面よりの深さ5cmを測り、埋土は上層の遺物包含層である淡暗褐色礫混シルトである。断面観察において掘り込み面が明瞭でないことから、人為的な遺構ではない可能性が高い。遺物は出土しなかった。

4. 遺物 (第5図、PL.13)

本調査区における遺物の出土量はかなり少なく、遺物出土が見られたのは、上述した第12トレンチ(1～3)のほか、第13トレンチ(4)のみであった。いずれも細片ばかりで全容の判明するものはない。1は須恵器杯である。口縁部および底部を欠く。底部より直線的に立ち上がる体部を有し、底部には僅かに外方向に開く高台を貼付ける。2、3は土師器甕である。どちらも口縁部から頸部のみである。2は頸部よりく字状に屈曲し、直線的に開く口縁部を持つ。端部は丸く収める。磨滅が激しく調整は不明である。胎土に多量の砂粒を含む。3は頸部より強く屈曲し、大きく開く口縁部を有する。口縁部はわずかに内湾しつつ立ち上がり、端部は平坦面をなす。磨滅が激しく調整は不明である。胎土に多量の砂粒を含む。4は土師器小皿である。黄灰白色の胎土を持つ。底部を欠くが、内湾しつつ緩やかに立ち上がり口縁端部は丸く収める。磨滅のため調整は不明である。

第3節 09－6区の調査

1. 位置 (第1、6図)

調査区は遺跡の南東縁部にあつて、国道26号「幡代北」交差点の北西約120mに位置する。現馬場集落の南端より約200m南下した地点であり、元来は現馬場集落と幡代集落の間に広がる耕作地の中に含まれるものであるが、調査区近隣では数件の住宅が小さなまとまりを形成している。地形的には沖積段丘に属する。近年は特に周辺での調査が増加しており、新たな情報が蓄積されつつある。南東50mに07-9区が位置するほか^⑧、西面する府道金熊寺男里線建設に伴う調査^⑨では、西約50mの地点において昨年度09-1区SD01^⑩の延長とも考えられる「大溝5」が、南西約100mの地下道部分の

調査において弥生時代方形周溝墓や12世紀代の集落、また南東約100mの地点より13世紀代の集落が確認されている。

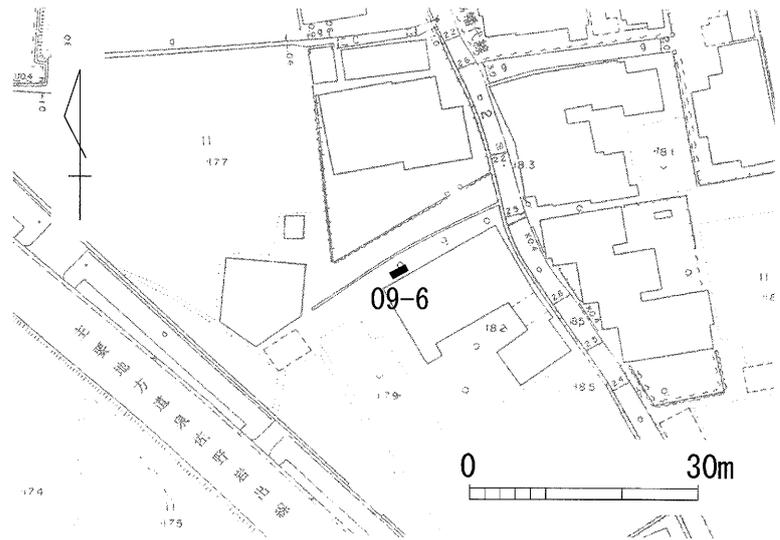
現況は畑地であったが、一部では造成が進んでいる。トレンチは1ヵ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4、9)

現代耕作土である淡灰黒色土(1層、約35cm)および部分的に確認される暗橙色砂質土(2層、

約10cm)以下、基本的には暗褐色礫混土(3層、約40cm)を経て地山である暗褐色礫へと至る。トレンチ東端部では3層と地山の間に淡暗褐色礫混シルト(4層、約20cm)が介在する。3、4層はいずれも自然堆積によるものと考えられる。トレンチ南東隅部においては地山が南西方向に急激に傾斜しており、直上にはにぶい黄褐色礫混砂質土(5層)が堆積する。同層は段丘構成層と捉えるには軟弱な堆積状況を示すことから、地山の窪地に溜まった自然堆積であるものと判断される。地山はトレンチ南東部を除き概ね平坦であり、上面の標高は16.8～16.9mを測る。

5層ならびに地山上面において精査を行ったが遺構は確認されなかった。またいずれの層位からも遺物は出土しなかった。



第6図 男里遺跡 09-6 区地形図

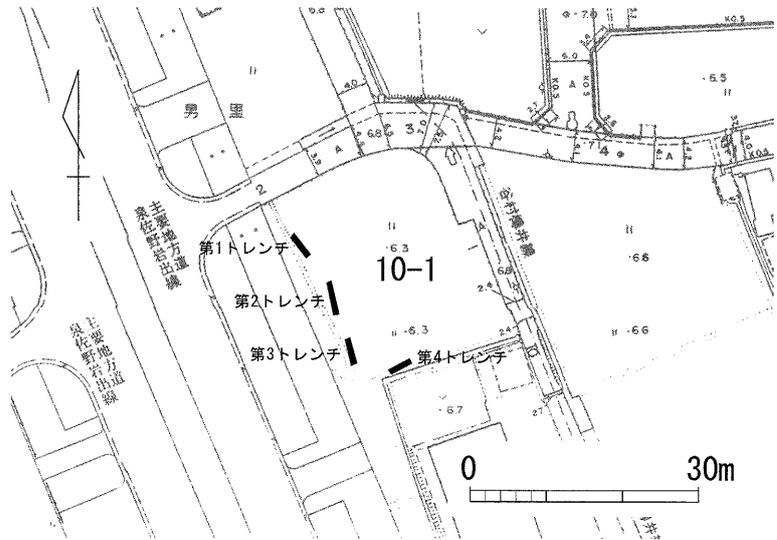
- 註 ① 大阪府教育委員会『熊野・紀州街道—調査報告編—』(1987)
 ② 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・II』(1997)
 ③ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・VII』(2003)
 ④ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・VI』(2002)
 ⑤ (財)大阪府文化財センター『男里遺跡』(2005)
 ⑥ 泉南市教育委員会「男里遺跡 95-1 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』(1996)
 ⑦ 泉南市教育委員会「男里遺跡・II」『泉南市文化財年報No.1』(1995)
 ⑧ 泉南市教育委員会「E区の調査」『男里遺跡発掘調査報告書』(2002)
 ⑨ 泉南市教育委員会「男里遺跡 96-7 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』(1997)
 泉南市教育委員会「男里遺跡 99-9 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVIII』(2001)
 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・VIII』(2004)
 ⑩ ④と同じ
 ⑪ ⑤と同じ
 ⑫ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・IV』(1999)
 ⑬ 泉南市教育委員会「男里遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XXIV』(2007)
 ⑭ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・VIII』(2004)
 ⑮ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・V』(2000)
 ⑯ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』(2002)
 ⑰ 堀田啓一「考古・古代」『泉南市史通史編』泉南市(1987)
 ⑱ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』(1978)
 泉南市教育委員会「男里遺跡 96-1 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』(1997)
 ⑲ 泉南市教育委員会「D区の調査」『男里遺跡発掘調査報告書』(2002)

- ⑳ ㉔と同じ
- ㉑ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』（1978）
- ㉒ 泉南市教育委員会「男里遺跡95-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』（1996）
- ㉓ （財）大阪府埋蔵文化財協会「1993年度の調査成果」『男里遺跡』（1994）
- ㉔ ㉑と同じ
- ㉕ 平成2年度、泉南市教育委員会による90-10区の調査。『泉南市遺跡群発掘調査報告書VIII』（1991）にトレンチ位置掲載。
平成18年度、泉南市教育委員会による06-8区の調査。『泉南市遺跡群発掘調査報告書XXV』（2008）にトレンチ位置掲載。
（財）大阪府文化財センター『男里遺跡』（2005）
- ㉖ 泉南市教育委員会「男里遺跡99-4区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVII』（2000）
（財）大阪府文化財センター『男里遺跡』（2005）
- ㉗ 堀田啓一「考古編」『泉南市史 史料編』泉南市（1982）
泉南市教育委員会「光平寺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』（1995）
泉南市教育委員会「光平寺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XXV』（2008）
- ㉘ ㉕と同じ。
- ㉙ 平成18年度、泉南市教育委員会による06-8区の調査。
泉南市教育委員会「男里遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XXV』（2008）
- ㉚ 泉南市教育委員会「幡代遺跡03-3区の調査」『新伝寺遺跡91-1区・幡代遺跡03-3区発掘調査報告書』（2004）
泉南市教育委員会『戎畑遺跡発掘調査報告書』（2005）
- ㉛ ㉗と同じ。
- ㉜ ㉖と同じ。
- ㉝ 泉南市教育委員会「男里遺跡96-6区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』（1997）
- ㉞ 泉南市教育委員会「男里遺跡92-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』（1993）
- ㉟ ㉗と同じ。
- ㊱ 泉南市教育委員会「男里遺跡89-7、8区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書VII』（1990）
泉南市教育委員会「男里遺跡96-5区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』（1997）
泉南市教育委員会「男里遺跡98-7区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVII』（2000）
- ㊲ 泉南市教育委員会「男里遺跡88-16区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書VII』（1990）
泉南市教育委員会「男里遺跡93-3区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XI』（1994）
泉南市教育委員会「男里遺跡02-6区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XX』（2003）
泉南市教育委員会「男里遺跡03-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XXI』（2004）
泉南市教育委員会「男里遺跡04-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XXII』（2005）
- ㊳ ㉗と同じ。
- ㊴ 泉南市教育委員会「男里遺跡07-9区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XXVI』（2009）
- ㊵ ㉕と同じ。
- ㊶ 泉南市教育委員会「男里遺跡09-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XXVII』（2010）

第3章 戎畑遺跡の調査

第1節 既往の調査（PL. 1、2）

戎畑遺跡は市域北西、男里川右岸の沖積地に立地する。地形的にはその大半を氾濫原および谷底低地が占めるが、遺跡東端は沖積段丘に属する。現在、遺跡北端から東半部は小学校地や宅地として利用されており、府道を挟んだ西半部については工場地となっている。遺跡の中央部分は今迄まで耕作地であったが、平成8年に大規模な区画整理が実施され、住宅地としての開発が進んでいる。



第7図 戎畑遺跡10-1区地形図

区画整理に伴う95-1区^①の発掘調査が実施されたほか、以降同区画内における調査が継続的に行われている。

95-1区では長さ100m以上、幅4m、深さ1mを測り、北東方向へ延びる大規模な直線溝が確認された。埋土には10世紀中葉を下限とする遺物が含まれており、平安時代の灌漑用水路と考えられている。この大溝の支流と捉えられる溝が95-1区をはじめ、97-1区や97-8区、97-15区において確認されているほか、95-1区の調査以前には大溝を踏襲したと考えられる地割りが残っており、それらを含めると大溝の総延長は350mを超えるものとなり、当該期の開発がかなりの広範囲におよぶものであったことがわかる。大溝の埋没後、13世紀代には比較的規模の大きい集落が営まれており、11棟以上の掘立柱建物や火葬施設、火葬墓、土坑墓などが確認されている。掘立柱建物には4間×2間規模のものが多く、桁行6間規模の建物も存在する。火葬施設は長土坑の中央に長軸平行の溝を設け、溝の両端を煙出しとしたもので、和泉市万町遺跡^②や奈良県宇陀地方^③では類例が知られるものの、泉南地域では初の確認例として注目される。土坑墓には日用品たる瓦器や土師器を埋納するもののほか、古瀬戸灰釉瓶や和鏡を伴うものもある。

他に特筆されるものとして焼成土坑および窯が挙げられる。焼成土坑は95-1区において5基確認されているほか、97-3区^④、府道敷における試掘調査^⑤などでも確認されており、ほとんどが直径2m前後の円形もしくは楕円形のプランを持つ。土坑底部が被熱し赤変するものや埋土に炭を含むものが多い。窯は同構造のものが2基確認されている。長土坑の底部に長軸平行に2条の焼成台を設け、焰道を構築するものであった。これら焼成土坑や窯は、出土遺物より真蛸壺を焼成したものと考えられ、窯に関しては95-1区以降、男里遺跡内においていくつかの類例^⑥が増加している。また95-1区では集落廃絶後に設けられた粘土採掘土坑が多く確認されている。集落の廃絶、移転を経てなお真蛸壺の生産は継続されていた可能性が考えられる。

第2節 10－1区の調査

1. 位置（第3、6図）

調査区は遺跡の南西端にあつて、府道金熊寺男里線「浜ノ宮口」交差点の南東約80mに位置する。地形的には氾濫原もしくは旧河道に属する。調査区より北東約20mで、95-1区の南端へ達する。95-1区の南端部では上述した遺構群のうち、火葬施設や窯、粘土採掘土坑などが確認されている。

現況は休耕地であり、トレンチは4ヵ所設定した。以下、北から南へ第1～4トレンチと呼称する。

2. 層位と遺物の出土状況（PL. 4、9）

各トレンチともに基本的な層序は共通するものであつた。以下、最も代表的な第1トレンチについて詳細を述べる。

現代耕作土である淡灰黒色土（1層、約30cm）以下、橙色混じり淡灰褐色砂質土（2層、約15cm）、淡褐色砂質土（3層、約15cm）、褐色砂質土（4層、約10cm）と続き、暗褐色礫混シルト（5層、約30cm）を経て地山である暗黄灰色礫混土へと至る。確認された層序はいずれも概ね水平堆積を呈し、うち2層は現代床土、3、4層はそれぞれ旧耕作土である。4層には土師器微細片を含むが、取り上げ不能であり詳細は不明である。地山直上の堆積である5層は95-1区においてほぼ全域に確認された中世遺物包含層に対応するものと考えられるが、ここでは遺物は全く出土しなかつた。地山である暗黄灰色礫混土は直径20cm以下の円礫を多く含み、非常に硬く締まる。地山上面において精査を行ったが、遺構は確認されなかつた。

第2～4トレンチでは4層が認められず、また3層直下には第1トレンチ5層に対応する淡暗褐色礫混粘質土が確認されるものの、同層は5層と比べて粘性が弱く、また円礫やクサリレキを多く含むといった差異が認められる。

- 註 ① 泉南市教育委員会『戎畑遺跡発掘調査報告書』（2005）
② 泉南市教育委員会「戎畑遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』（1998）
③ 和泉丘陵内遺跡調査会『万町遺跡』（1991）
④ 白石太一郎「奈良県宇陀地方の中世墓地」『国立歴史民俗博物館研究報告第49集』（1993）
⑤ 泉南市教育委員会「戎畑遺跡97-3区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』（1998）
⑥ 財団法人大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』（1994）
⑦ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』（2002）
泉南市教育委員会「男里遺跡07-7区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XXV』（2008）

第4章 岡中遺跡の調査

第1節 既往の調査 (PL. 1、2)

岡中遺跡は市域平野部の南西端に位置する。遺跡範囲は現在の信達岡中集落とほぼ重複し、遺跡の西および南端には金熊寺川が蛇行しつつ北上し、東端は愛宕山によって限られている。地形的には全域が金熊寺川右岸に発達する沖積地に含まれており、遺跡の北西隅が旧河道であることを除けば、すべての地点が沖積段丘に分類される。

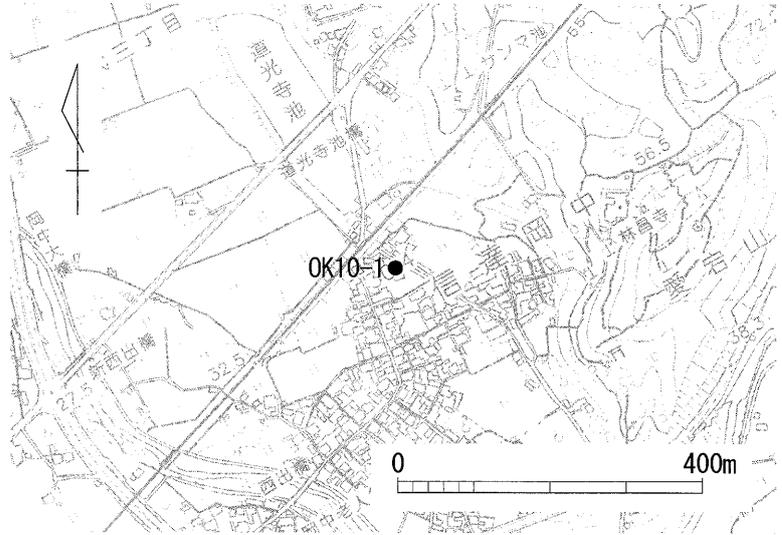
現在の信達岡中集落は、遺跡の北端から西端を進む熊野街道^①に沿って展開しており、街道沿いには比較的古い家並みが残る。かえって遺跡南東部の多くは現在も耕作地として利用されている。集落中央に位置する鎮守社の境内には大阪府天然記念物に指定されている大楠とマキがある。

現在までに現集落内を中心として20数件の調査が行われている。鎮守社の周囲において平安時代末期の瓦を伴う建物基壇や鍛冶炉遺構^②、14～15世紀の土坑墓群^③などが確認されているほか、中世以降に形成された複数の耕作面^④も確認されるなどし、中世集落および寺院、また集落に付随する生産地としての内容が明らかになりつつある。

先の寺院跡は周辺に残る小字^⑤より「長善寺」であった可能性が高く、出土軒丸瓦は、現在の林昌寺境内に隣接する林昌寺瓦窯において焼成された製品であった。他に林昌寺跡をはじめ、岸和田市畑遺跡においても同範品^⑥が出土している。

現在の岡中という地名は明治17年に改名されたもので、以前は中村と呼ばれていた^⑦。元禄年間に記された『泉州志』^⑧には信達荘の一つとして「中村」がみえ、同時に「長岡王子」や「岡寺(林昌寺)」、「躑躅岡」の所在地として「岡村」が登場する。「長岡王子」の項で「岡村在中村内」とあることから、中村の一部が岡村と呼ばれていたものと考えられる。『林昌寺縁起』^⑨には、もと温泉山岡寺と称したものを11世紀末に勅命により現在の山号寺名に改めたとあることから、愛宕山および西麓一帯が岡村と呼ばれていたことは確実である。現在知られる小字名では、愛宕山の西に「岡」、「岡ノ上」、「岡ノ原」、「岡ノ下」といった岡にまつわる小字が多く分布する。一方、現在の鎮守社周辺には「長」という地名が多く残り、「長」が転じて「中」になったものと考えられる。

これらのことから、岡村は愛宕山南西麓に、また中村は鎮守社周辺を中心として発達したものであったが、2つの集落が発展するに伴い、集落間の空閑地が居住域もしくは生産地として開発される



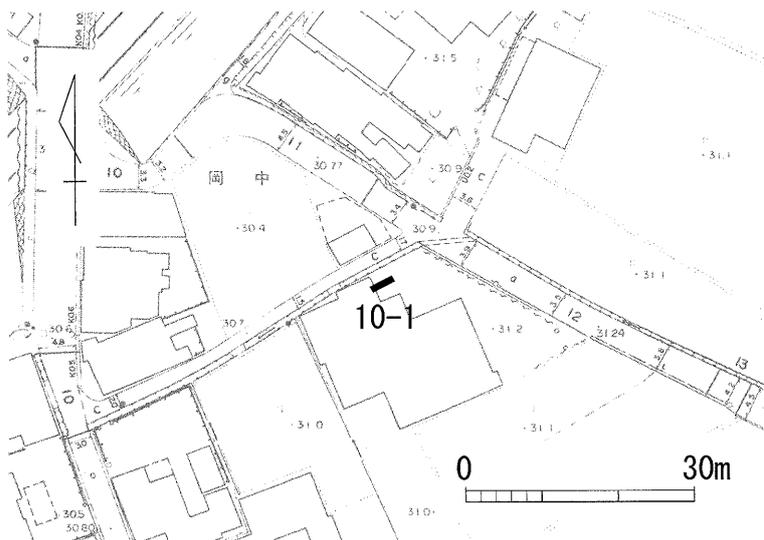
第8図 岡中遺跡調査区位置図

に至って両集落の総称もしくは呼び名としての中村が用いられるようになった可能性がある。考古学的には両集落共に林昌寺（岡寺）、「長善寺」という寺院が存在したことが明らかであり、いずれも平安時代末期の創建が考えられるのであるが、ここでいう岡村の範囲に含まれる調査例はさほど多くはないため、他の集落構造等については比較できうる段階にない。今後情報の蓄積を待ってより詳細な比較検討を行わねばならない。蛇足ながら「長岡王子」はまさしく「長（中）」と「岡」の王子とも読め、熊野詣の盛んであった頃より、両集落は半共同体として運営されていたのかも知れない。

第2節 10-1区の調査

1. 位置（第8、9図）

調査区は遺跡の北東隅部にあつて、現信達岡中集落の北端に位置する。地形的には金熊寺川右岸に発達する沖積段丘の南東縁部、丘陵西麓との境界付近に立地する。これまでに岡中遺跡においては、現集落内を中心として20数件の調査が行われており、中世寺院や鍛冶炉遺構^⑧、土坑墓^⑨などのほか、多くの地点において中世を中心とする遺物包含層が確認されている。本調査区の周辺では、南西約30mに位置する93-1区において中世以前と考えられるピットや土坑が確認されている^⑩。



第9図 岡中遺跡10-1区地形図

現況は更地であり、トレンチは1ヵ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況（PL. 4、9）

盛土（1層、約15cm）、さらに近現代の耕作土および床土である淡灰色土（2層、約15cm）、灰色混じり暗橙色土（3層、約10cm）以下、淡灰褐色土（4層、約20cm）、淡黄灰色土（5層、約10cm）、灰褐色砂質土（6層、約15cm）、暗黄灰色砂質シルト（7層、約10cm）がいずれも概ね水平堆積を呈する。4、6層は旧耕作土、5、7層は旧床土である。7層以下は基本的に暗褐色礫混粘土（9層、約50cm）を経て褐色礫混土へと至る。トレンチ東西両端には礫を余り含まない暗褐色系粘土やシルトが存在するが、いずれも9層の起伏に激み堆積したものと考えられるもので、基本的には同質のものと捉えられることが可能である。9層は93-1区における遺構検出面に対応するものであるが、本調査区では遺構は確認されなかった。遺物は5層に土師器微細片が含まれるものの、取り上げ不能であり詳細は不明である。

- 註 ① 大阪府教育委員会『熊野・紀州街道－調査報告編－』（1987）
- ② 1988年度、泉南市教育委員会による調査。
- ③ 泉南市教育委員会「岡中遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅴ』（1988）
- ④ 90-1区、95-2区が愛宕山裾で、94-2区、97-1区が遺跡南端部でそれぞれ確認されている。
泉南市教育委員会「岡中遺跡90-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅷ』（1991）
泉南市教育委員会「岡中遺跡94-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅡ』（1995）
泉南市教育委員会「岡中遺跡95-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅣ』（1997）
泉南市教育委員会「岡中遺跡97-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅤ』（1998）
- ⑤ ③と同じ。
- ⑥ 1993年4月、大阪市立博物館特別陳列「私たちの考古学撰河泉の古瓦Ⅱ」における撰河泉古瓦研究会（現撰河泉古代寺院研究会）による検討会において確認された。
泉南市教育委員会「林昌寺瓦窯」『泉南市文化財年報No.1』（1995）
- ⑦ 「巻末年表」『泉南市史通史編』泉南市（1987）
- ⑧ 「中世編」『泉南市史史料編』泉南市（1982）
- ⑨ 仲村 研「古代・中世」『泉南市史通史編』泉南市（1987）
- ⑩ ②と同じ。
- ⑪ ③と同じ。
- ⑫ 泉南市教育委員会「岡中遺跡93-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅠ』（1994）

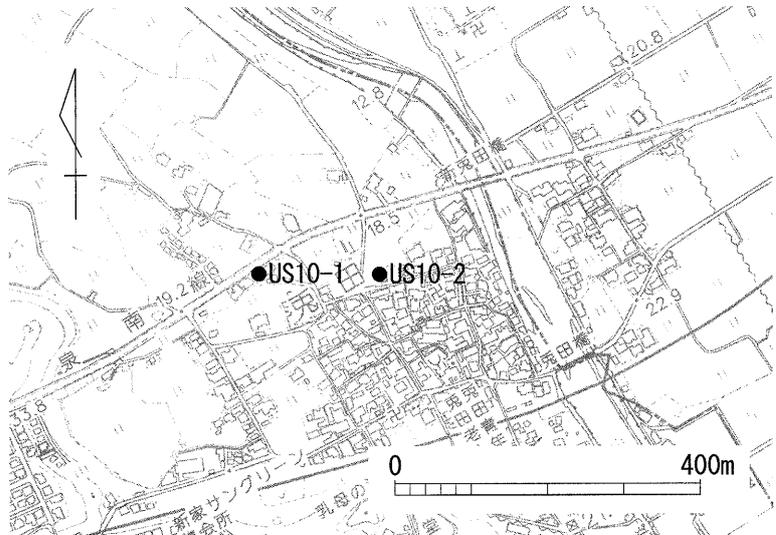
第5章 兔田遺跡の調査

第1節 既往の調査 (PL. 1、2)

兔田遺跡は市域平野部の南東隅に位置する。遺跡の中央から東半に現兔田集落が立地し、東端は檜井川河道と接する。遺跡の西側は耕作地として利用されている。

地形的には檜井丘陵の東縁を縫って形成された檜井川左岸の沖積地に立地する。大半を沖積段丘が占めるが、遺跡の北東部に旧河道が、南西隅には新家古墳群や兔田古墳群が立地する丘陵を含む。

これまでに遺跡の中央部分にあたる現集落西半部を中心として10数件の調査が行われ、集落の初源を中世と考える遺物包含層のほか、ピットなどの遺構^④が確認されている。一方、大半の調査区においては水成堆積による砂礫が基盤層をなすことが明らかとなり、安定した段丘面が確認される地点は今のところ極めて限定的である。



第10図 兔田遺跡調査区位置図

第2節 10-1区の調査

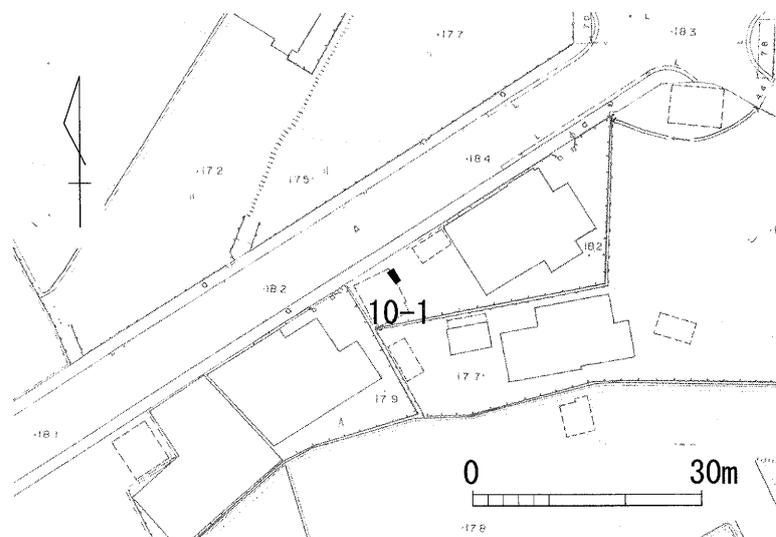
1. 位置 (第10、11図)

調査区は遺跡の北西隅部にあって、現兔田集落の中心部よりやや北西に外れた、府道大阪和泉南線に南面する地点である。地形的には沖積段丘に属する。周辺では、03-1区、02-1区、07-1区などの調査^④が行われている。

現況は更地であり、トレンチは1ヵ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4、10)

盛土 (1層、約70～90 cm) を



第11図 兔田遺跡10-1区地形図

除去すると、淡灰黒色土（2層、約20cm）、灰褐色混じり橙色土（3層、約10cm）、淡灰褐色土（4層、約15cm）、灰白色混じり暗黄色砂質土（5層、約15cm）、淡灰褐色混じり淡褐色土（6層、約30cm）を経て明黄色粘質土へと至る。いずれも水平堆積を呈し、2層は現代耕作土、3、4層は床土であり、5層は整地層もしくは旧耕作土、6層は旧耕作土と考えられる。うち6層には僅かに中世と思しき土師器細片を含むが、観察不能であり詳細は不明である。

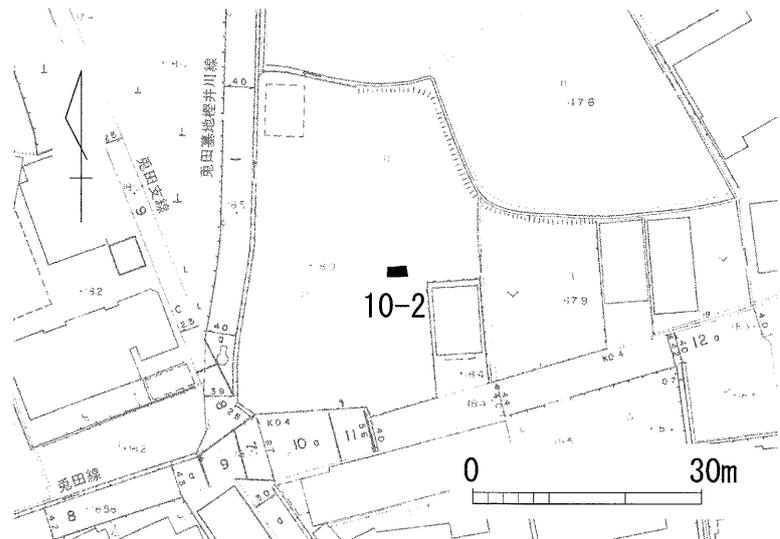
最下層である明黄色粘質土は地山ではないものの、一定の広がりをも想定し得る安定面と捉えることが可能である。

第3節 10-2区の調査

1. 位置（第10、12図）

調査区は遺跡の北東部、現兎田集落の中央北端に位置する。地形的には沖積段丘に属するものの、これまでのところ当遺跡内においては安定面はほとんど確認されておらず、大半の地点では砂礫による基盤層が明らかとなっている。これまでに本調査区の南約100mに位置する96-1区や同約200mの95-1区においてピットや溝といった遺構[®]が確認されている。

現況は更地であり、トレンチは1カ所設定した。



第12図 兎田遺跡10-2区地形図

2. 層位と遺物の出土状況（PL. 4、10）

造成に伴う盛土（約35cm）および現代耕作土の攪拌層（約25cm）を除去すると、灰黄色土（3層、約5cm）、黄灰色砂質土（4層、約10cm）、暗黄灰色砂質土（6層、約15cm）の各層が概ね水平堆積を呈する。部分的に4層と6層の間に淡灰褐色土（5層、約5cm）が介在する。6層以下は基本的に暗黄褐色混じり淡灰褐色砂礫（7層、約5～10cm）を経て淡灰褐色砂礫へと至る。地山と捉えられる淡灰褐色砂礫上面には東西方向への緩やかな起伏が存在し、上面の窪地にのみ7層が堆積している。

確認された層序のうち、3層は床土もしくは旧耕作土、4～6層は旧耕作土、7層は自然堆積によるものと考えられる。淡灰褐色砂礫上面において精査を行ったが、遺構は確認されず、またいずれの層位からも遺物は出土しなかった。

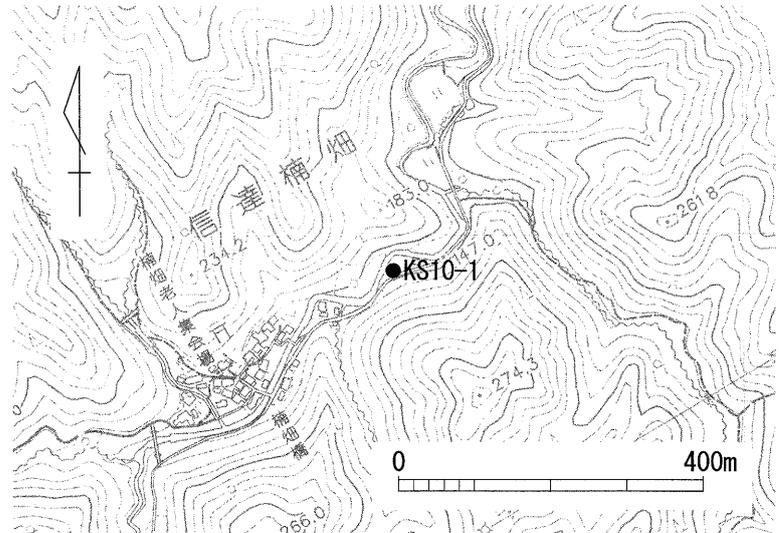
註 ① 泉南市教育委員会「兎田遺跡95-1、2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅢ』（1996）

- ② 泉南市教育委員会 「兎田遺跡 02-1 区の調査」 『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XX』 (2003)
- 泉南市教育委員会 「兎田遺跡 03-1 区の調査」 『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XX I』 (2004)
- 泉南市教育委員会 「兎田遺跡 07-1 区の調査」 『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XX V』 (2008)
- ③ 泉南市教育委員会 「兎田遺跡 95-1 区の調査」 『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XIII』 (1996)
- 泉南市教育委員会 「兎田遺跡 96-1 区の調査」 『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XV』 (1998)

第6章 楠畑遺跡の調査

第1節 既往の調査 (PL. 1、2)

楠畑遺跡は基盤山地である和泉山脈を抜け、和歌山県岩出市へと通じる根来街道の支道沿いにおいて、金熊寺川の支流である楠畑川によって開析された谷合に立地する。地形的には楠畑川によって形成された沖積地に属するもので、南北に細長い些少な平坦地を成している。標高は143.0～151.0 mを測り、北へ向かって高度を下げる。平坦地は水田や果樹園として利用されているほか、一部に工場地なども存在する。遺跡の南端は



第13図 楠畑遺跡調査区位置図

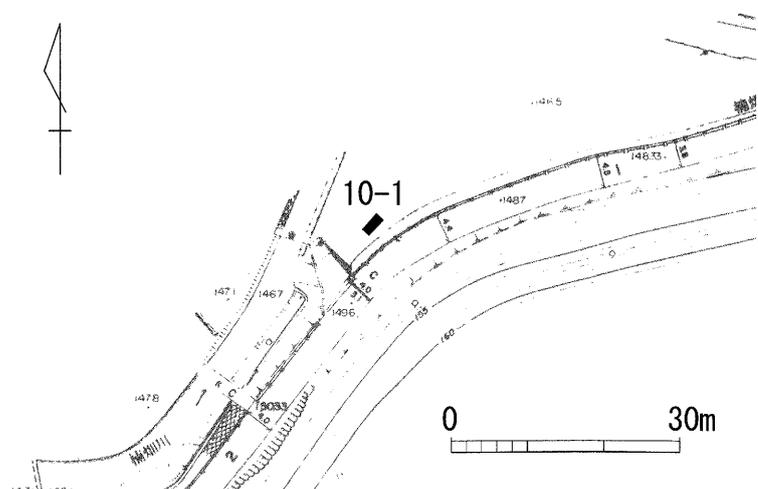
現信達楠畑集落の入り口へと接する。同谷沿いには約500 m北側に楠畑北遺跡が位置している。本遺跡とともに平成2年度の分布調査^①により奈良時代および中世の遺物散布地として周知されたものであるが、いずれも立地からこれまで本格的な発掘調査は行われていない。

根来街道は三畑越とも称されるように^②、街道沿いには北から信達童子畑、信達楠畑、信達葛畑の山間部集落が存在する。そのうち楠畑集落は上述したように楠畑川沿いの谷合深くに立地するもので、現在は20世帯程によって構成されている。集落では山仕事を主な生業とし、クヌギの割木を主に生産しているほか、竹の出荷や谷合の水田における米作も盛んであったようである。現在、集落の一番高いところに大雄寺や山王大権現が祀られているが、大雄寺境内にある正平22(1367)年銘の板碑は六十六部功を顕彰したのものとしては西日本最古のものとして注目される^③。山王大権現では宮講と呼ばれる一種の宮座が営まれている^④。

第2節 10-1区の調査

1. 位置 (第13、14図)

調査区は遺跡の南端にあって、



第14図 楠畑遺跡10-1区地形図

東約 200 m の地点である。根来街道より分岐し楠畑集落へと通ずる市道楠畑線に南面する耕作地であり、調査区の北縁は楠畑川へと落ち込む崖線となっている。

現況は休耕地であり、トレンチは 1 ヶ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4、10)

現代耕作土 (1 層、約 40 cm) および現代の廃棄物を含む盛土 (2 層、約 80 cm) を除去すると、淡青灰色粗砂 (3 層、約 60 cm) が現われる。還元色を呈することから谷の埋土と考えられるが、かなり多くの現代廃棄物を含むことから盛土施工以前の表土であるとみて間違いはないだろう。3 層直下には青灰色礫混粗砂が確認された。地山ではないもののプライマリーな谷埋土として捉えることのできるものである。

- 註 ① 泉南市教育委員会「事業の概要」『泉南市文化財年報No.1』(1995)
② 大阪府教育委員会『熊野・紀州街道一調査報告編一』(1987)
③ 仲村 研「古代・中世」『泉南市史通史編』泉南市(1987)
泉南市教育委員会『泉南市信達葛畑・信達楠畑地区民俗資料調査報告』(1995)
④ 泉南市教育委員会『泉南市信達葛畑・信達楠畑地区民俗資料調査報告』(1995)

第7章 まとめ

本書では、平成22年1月1日より同12月31日までの間、文化財保護法に基づく届出等に基づいて行われた個人住宅建設等に伴う発掘調査および確認調査、9件について報告している。以下にこれらの調査成果を概観し、今年度のまとめとしたい。

男里遺跡では、今年度3件の調査が行われ、また昨年度調査の1件についても併せて報告することができた。本遺跡では例年個人住宅の建て替え等に伴い数多くの調査が実施されているが、今年度に関しては昨今の経済情勢を反映するものか、互いに隣接する調査区において共同住宅建設に伴う事前確認調査が実施されたにとどまっている。調査の結果、相互を関連付けて考察すべき成果が得られたため、本書においては一連の調査区として扱っている。

10-1、2、3区は遺跡のほぼ中央に位置する双子下池北西堤より北西約100～200mに位置する。従来より旧河道の存在が指摘されている地点であるが、周辺では縄文時代後期から晩期の資料⁹が多く獲得され、また古墳時代資料¹⁰も散見されるなど、遺跡内でも特に注目すべき地点であるとの認識を持たれていた。延べ23ヵ所のトレンチを設定し、調査区のほぼ中央に位置する第12トレンチにおいて遺構が確認された。柱列を構成する可能性のあるピットが確認されたが、調査範囲が些少であるため、横方向への広がりをおぼろげに掴むことはできなかった。遺構面直上の包含層より8世紀代の遺物が少量出土しており、古代以前の時期に属する可能性が高いものと考えられる。周辺では同時期に関する資料は知られておらず、今後遺構、遺物の広がりをおぼろげに追求する必要がある。

また遺構面である地山は、その東西を大規模な流路によって限られていることが明らかとなった。流路は2条存在し、いずれも片側の肩部分が断片的に確認されたに過ぎないが、調査区を縦断して南北に延びると想定される西流路に関しては、延長140m以上、最大幅30m以上、部分的に確認することのできたところでは、深さ2m以上の規模を有するものと考えられる。東流路に関しても流路ベースとなる地山の急激な傾斜が確認されていることから、西流路と比べてもさほど遜色のない規模が想定される。これらの流路は現地割には表出しておらず、現状では規模や方向を考察する手がかりを得ることは難しい。埋没時期に関しても東流路において部分的に第12トレンチの包含層に近似する層位が存在することから、古代以前の埋没が推測されるにすぎない。しかしながら、これらの大規模流路の存在が明らかとなったことにより、生活面たりうる地山の範囲が極めて限定されることとなった。今後周辺における遺構の展開を考えるうえで、大きな指標が得られたものと言えよう。

09-6区は遺跡の南東縁に位置する。近年周辺での調査例が増加しており、従来知られる遺構、遺物の広がりをおぼろげに確認されるものと期待された。結果、安定した地山は存在するものの、一様に広がるものではなく、部分的に急激な落ち込みを形成するものであることが判明した。落ち込み部に自然堆積層が存在することから自然地形の一部である可能性が極めて高いものと考えられる。全容が不明であるため即断はしかねるが、遺構や遺物がまったく確認されなかったことからすると、こうした些か不安定ともとれる地形的要因によって生活面が調査区にはおぼろげに広がらなかったものと考えられる。

戎畑遺跡では1件の調査が行われた。10-1区は平安時代以前の灌漑用水路や13世紀代を中心とする中世集落が確認された95-1区¹¹にほぼ隣接することから、その実態が極めて注目されたものである。

しかしながら明確な遺構や遺物は確認されず、95-1区とはまったく異なる内容が明らかとなった。これまでに周辺の調査区では（暗）黄褐色粘土～シルトの地山が広く分布することが明らかとなっており、本調査区でみられたような円礫を多量に含むものではないことが確認されている。こうした地形的な差異によって遺構、遺物の分布状況に大きな隔たりが存在するものと考えられ、その境界は本調査区の北、市道藤の川樽井線と重なるものと想定されるに至った。より具体的に集落構造を復元するための手がかりを得ることができたものといえよう。

岡中遺跡では、1件の調査が行われた。結果、調査区が長らく（恐らくは中世以降）継続的に耕作地であったことが判明した。また耕作土以下の状況から、耕地化される以前は氾濫原状に不安定な地点であったことが明らかとなった。

兎田遺跡では2件の調査が行われた。遺跡の北西隅部に位置する10-1区において、安定面と捉えることが可能な明黄色粘質土層が確認された。遺構は未確認ながら、周辺での調査が進めば同層をベースとする遺構が存在する可能性が高いものと思われる。これまで地形的に不安定な地点が多く確認されている同遺跡においては、今後の指標となる鍵層である可能性があるものである。

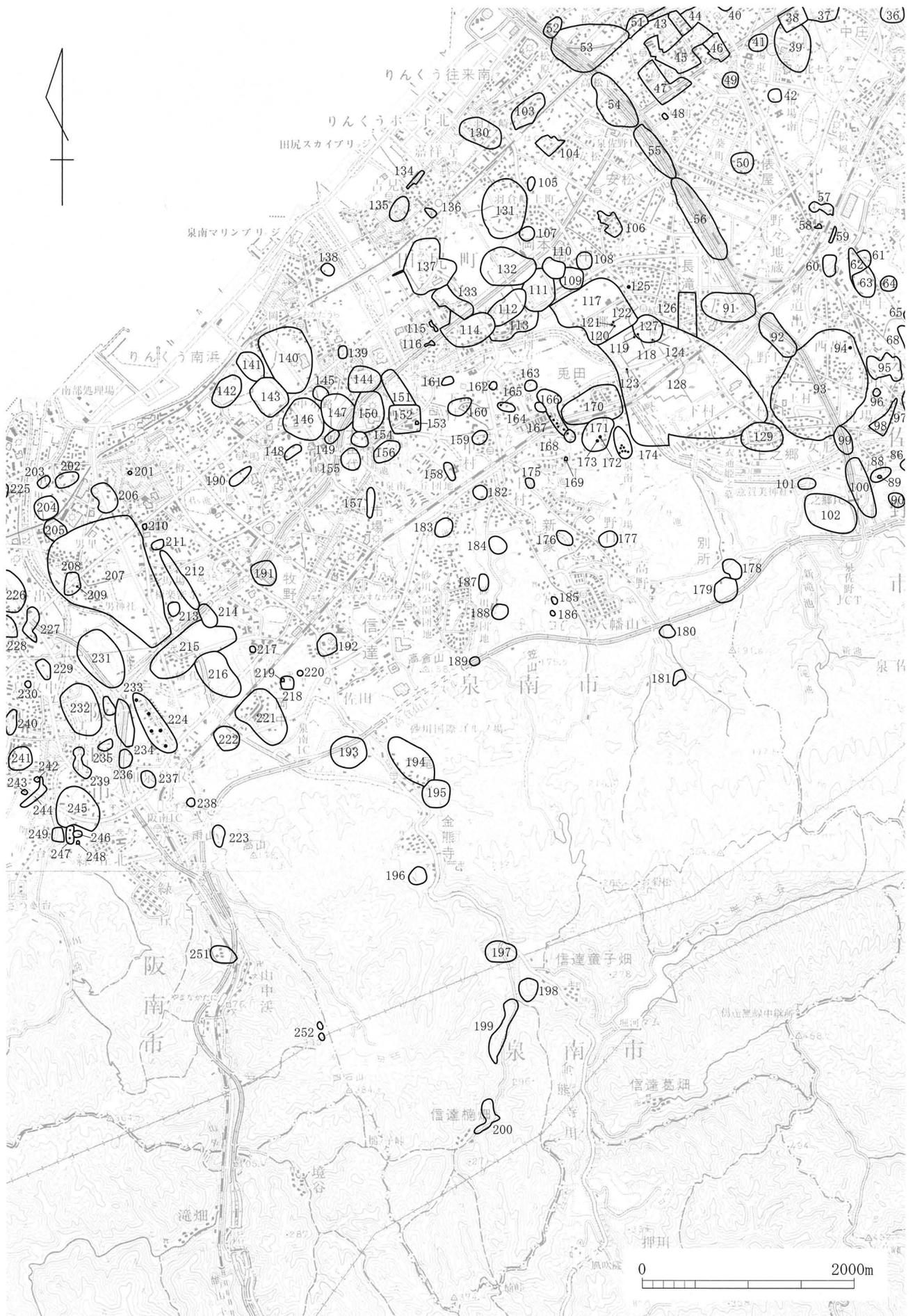
10-2区は、遺跡の北東部に位置する。砂礫による地山が確認されたことで、地形的に氾濫原に属することが明らかとなった。また複数の旧耕作土が存在することから、継続的に耕作地として利用されてきた地点であることが確実であるが、遺物がまったく出土しておらず、時期的には不明であると言わざるを得ない。

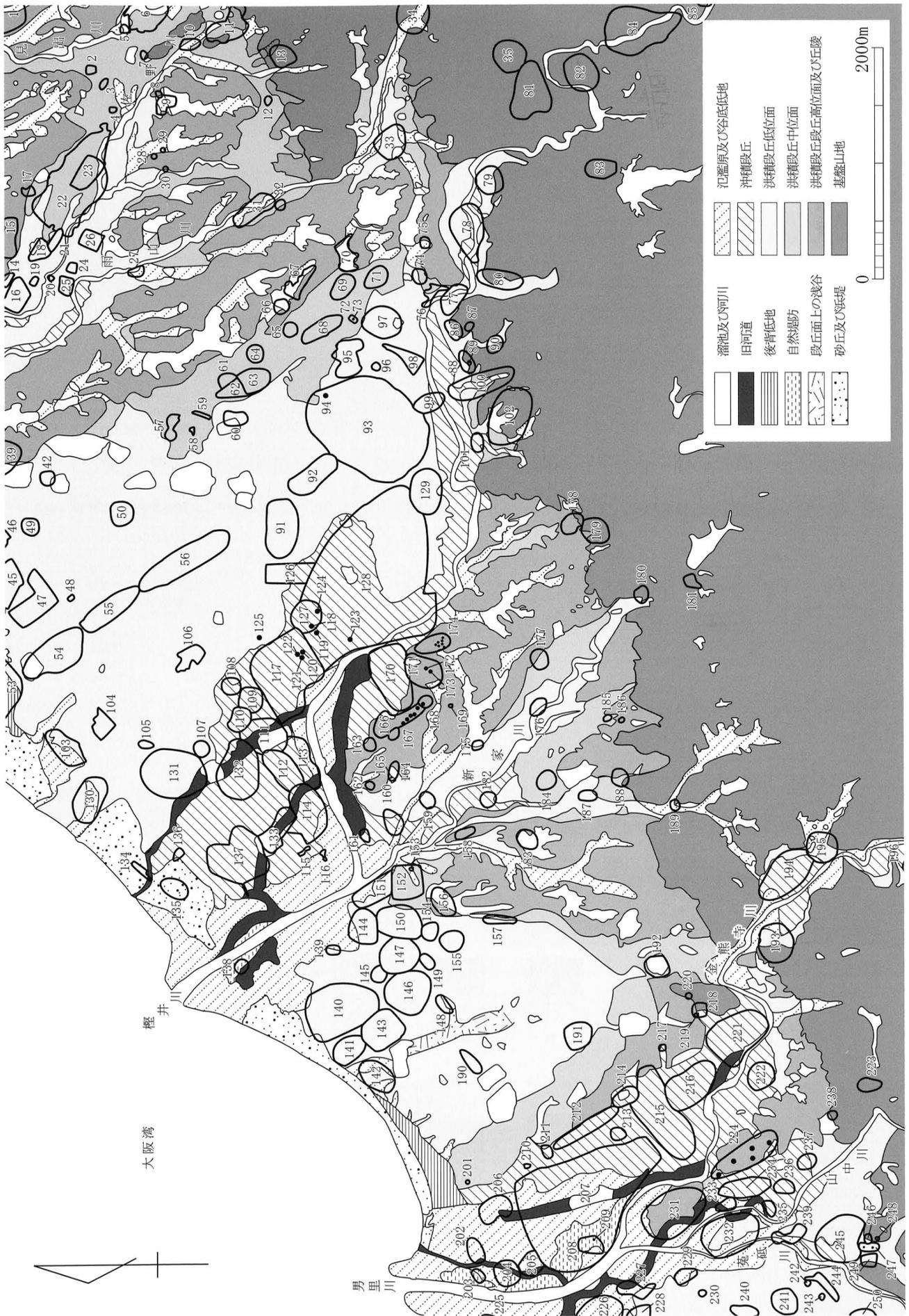
楠畑遺跡では1件の調査が行われた。遺跡発見以来初めての本格的な発掘調査であり、遺跡としての内容究明はもとより、調査区が現集落近接地に位置することから、集落内大雄寺に存在する正平22年銘板碑^④に結びつく成果が得られないものかと期待された。調査の結果、現代耕作土以下、盛土、旧表土を経て、プライマリーな谷埋土と考えられる粗砂層が確認された。遺構や遺物に関してはまったく確認されなかったが、盛土や旧表土に現代廃棄物が少なからず含まれることからすると、調査区が耕作地となったのは比較的最近のことであると考えられる。また旧表土に関しても還元色を呈する粗砂層であることから、耕地化以前の調査区は沼地状態の不安定な地点であったことが確かめられた。楠畑川谷合いに点在する耕作地の成立が一様ではないことを示唆するものと言える。

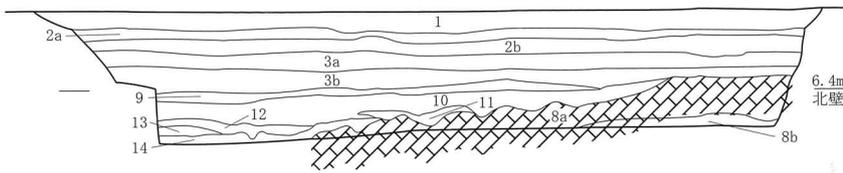
- 註 ① 泉南市教育委員会「男里遺跡・Ⅱ」『泉南市文化財年報No.1』（1995）
泉南市教育委員会「男里遺跡 95-1 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅢ』（1996）
泉南市教育委員会「男里遺跡 96-7 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅣ』（1997）
- ② 堀田啓一「考古・古代」『泉南市史通史編』泉南市（1987）
泉南市教育委員会「男里遺跡 92-1 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』（1993）
- ③ 泉南市教育委員会『戎畑遺跡発掘調査報告書』（2005）
- ④ 仲村 研「古代・中世」『泉南市史通史編』泉南市（1987）
泉南市教育委員会『泉南市信達葛畑・信達楠畑地区民俗資料調査報告』（1995）

第5表 文化財一覧表

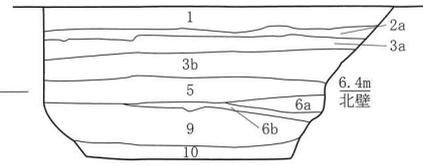
1	正法寺跡	52	松原遺跡	103	羽倉崎東遺跡	154	大苗代遺跡	205	男里北遺跡
2	小垣内遺跡	53	中開遺跡	104	安松田遺跡	155	仏性寺跡	206	戎畑遺跡
3	小垣内西遺跡	54	末廣遺跡	105	羽倉崎上町遺跡	156	海宮宮池遺跡	207	男里遺跡
4	小垣内西遺跡	55	安松遺跡	106	南中安松遺跡	157	市場遺跡	208	光平寺跡
5	金剛法寺跡	56	長滝遺跡	107	岡本廃寺	158	向井山遺跡	209	光平寺石造五輪塔
6	久保城跡	57	北尻遺跡	108	岸ノ下遺跡	159	新家遺跡	210	樺井南遺跡
7	大宮遺跡	58	日根野駅西遺跡	109	中菖蒲遺跡	160	下村遺跡	211	男里東遺跡
8	大浦遺跡	59	日根野駅東遺跡	110	岡ノ崎遺跡	161	下村北遺跡	212	長山遺跡
9	大浦中世墓地	60	白水池遺跡	111	道ノ池遺跡	162	下村1号墳	213	山ノ宮遺跡
10	久保B遺跡	61	岡口遺跡	112	藤波遺跡	163	新家オドリ山東遺跡	214	前田池遺跡
11	鳥羽殿城跡	62	中嶋遺跡	113	樫井城跡	164	新家オドリ山遺跡	215	幡代遺跡
12	来迎寺遺跡	63	小塚遺跡	114	樫井西遺跡	165	下村2号墳	216	幡代南遺跡
13	墓ノ谷遺跡	64	十二谷遺跡	115	夫婦池西遺跡	166	新家古墳群	217	奥ノ池遺跡
14	大久保D遺跡	65	丁田遺跡	116	新樫井西遺跡	167	新家オドリ山南遺跡	218	林昌寺跡
15	大谷池遺跡	66	新池尻遺跡	117	諸目遺跡	168	フキアゲ山西遺跡	219	林昌寺瓦窯跡
16	大久保B遺跡	67	八重治池	118	長滝1号墳	169	引谷池窯跡	220	林昌寺銅鐸出土地
17	祭礼御旅所跡	68	大坪遺跡	119	長滝2号墳	170	兎田遺跡	221	岡中遺跡
18	紺屋遺跡	69	市堂遺跡	120	長滝3号墳	171	フキアゲ山東遺跡	222	岡中西遺跡
19	大久保E遺跡	70	尼津池	121	長滝4号墳	172	フキアゲ山1号墳	223	雨山南遺跡
20	大久保F遺跡	71	北之前遺跡	122	長滝5号墳	173	フキアゲ山2号墳	224	高田山古墳群
21	口無池遺跡	72	丹生神社遺跡	123	長滝6号墳	174	兎田古墳群	225	福島遺跡
22	野田遺跡	73	丹生神社跡	124	長滝7号墳	175	池尻遺跡	226	馬川遺跡
23	東円寺跡	74	八王子遺跡	125	城ノ塚古墳	176	中の川遺跡	227	下出北遺跡
24	大久保C遺跡	75	屯田遺跡	126	禅興寺跡	177	岩の前遺跡	228	下出遺跡
25	降井家屋敷跡	76	日根神社遺跡	127	ダイジョウウ寺跡	178	別所北遺跡	229	室堂遺跡
26	中家住宅周辺遺跡	77	西ノ上遺跡	128	三軒屋遺跡	179	別所遺跡	230	水附遺跡
27	大久保A遺跡	78	土丸遺跡	129	上之郷遺跡	180	高野遺跡	231	平野寺(長楽寺)跡
28	五門北古墳	79	土丸南遺跡	130	羽倉崎遺跡	181	昭和池遺跡	232	向出遺跡
29	五門古墳	80	笹ノ山遺跡	131	船岡山遺跡	182	上村遺跡	233	久保田遺跡
30	五門遺跡	81	土丸城跡	132	船岡山南遺跡	183	狐池遺跡	234	高田遺跡
31	朝代北遺跡	82	下大木遺跡	133	夫婦池遺跡	184	上野中道遺跡	235	高田西遺跡
32	山ノ下城跡	83	稲倉池北方遺跡	134	林寄遺跡	185	宮遺跡	236	高田南遺跡
33	池ノ谷遺跡	84	大木遺跡	135	吉見藩陣屋跡	186	宮南遺跡	237	和泉鳥取遺跡
34	成合寺遺跡	85	中大木遺跡	136	中島遺跡	187	芋堀遺跡	238	雨山遺跡
35	雨山城跡	86	川原遺跡	137	田尻遺跡	188	石ヶ原遺跡	239	向山遺跡
36	山出遺跡	87	向井山遺跡	138	川原遺跡	189	高倉山南遺跡	240	正方寺遺跡
37	湊遺跡	88	母山遺跡	139	岡田東遺跡	190	本田池遺跡	241	西畑遺跡
38	檀波羅密寺跡	89	母山近世墓地	140	岡田遺跡	191	上代石塚遺跡	242	亀川北遺跡
39	檀波羅遺跡	90	梨谷遺跡	141	氏の松遺跡	192	信之池遺跡	243	亀川西遺跡
40	上町東遺跡	91	植田池遺跡	142	座頭池遺跡	193	滑瀬遺跡	244	亀川遺跡
41	市場東遺跡	92	郷之芝遺跡	143	岡田西遺跡	194	六尾遺跡	245	自然田遺跡
42	伊原池遺跡	93	日根野遺跡	144	新伝寺遺跡	195	六尾南遺跡	246	玉田山遺跡
43	若宮遺跡	94	新道出牛神	145	中小路北遺跡	196	金熊寺遺跡	247	玉田山古墳群
44	若宮南遺跡	95	宮ノ前遺跡	146	中小路西遺跡	197	童子畑北遺跡	248	玉田山須恵器窯跡
45	上町遺跡	96	垣外遺跡	147	中小路遺跡	198	童子畑遺跡	249	寺田山遺跡
46	市場西遺跡	97	野々宮遺跡	148	坊主池遺跡	199	楠畑北遺跡	250	井閑遺跡
47	中ノ池遺跡	98	久ノ木遺跡	149	中小路南遺跡	200	楠畑遺跡	251	山中溪遺跡
48	中町遺跡	99	机場遺跡	150	北野遺跡	201	専徳寺遺跡	252	山中溪石切場跡群
49	市場南遺跡	100	棚原遺跡	151	一岡神社遺跡	202	天神ノ森遺跡		
50	俵屋遺跡	101	向井代遺跡	152	海会寺跡	203	キレット遺跡		
51	大西遺跡	102	向井池遺跡	153	海会寺瓦窯	204	高田遺跡		



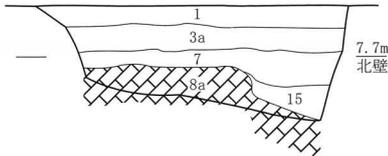




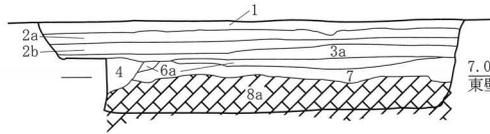
第8トレンチ断面図



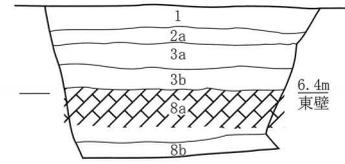
第1トレンチ断面図



第15トレンチ断面図

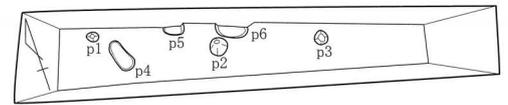
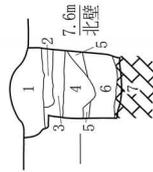
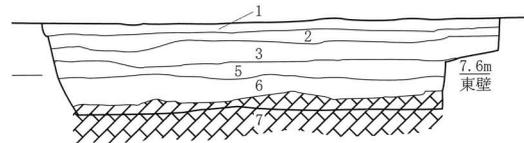


第5トレンチ断面図

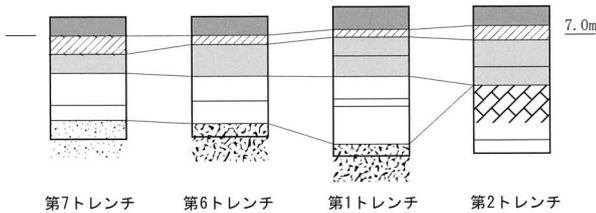


第2トレンチ断面図

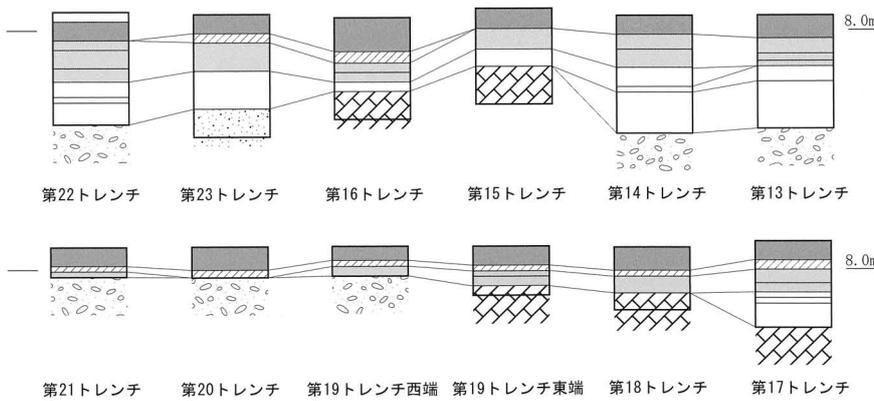
1. 灰黒色土 (耕作土)
- 2a. 橙色混じり灰色砂質土
- 2b. 暗橙色～黄灰色砂質土
- 3a. 暗黄色混じり灰褐色砂質土 (耕作土)
- 3b. 淡灰褐色土～暗黄灰色砂質土 (耕作土)
4. 黄灰色砂
5. 黄灰色土
- 6a. 褐灰色～黄灰色砂質土、シルト
- 6b. 暗黄褐色砂質土
7. 褐灰色～淡暗褐色砂質土、シルト
- 8a. 灰褐色混じりにぶい黄褐色砂質シルト (Mg粒多含)
- 8b. にぶい暗黄褐色シルト、粘土
9. 灰褐色～褐灰色砂質土
10. 暗灰褐色～暗灰色粘土
11. 褐色混じり灰色砂
12. 暗黄灰色砂
13. 明灰色砂
14. 暗灰色粘土
15. 暗褐色礫混シルト (径20cm円礫多含)



ON10-1、2、3区トレンチ断面図



第7トレンチ 第6トレンチ 第1トレンチ 第2トレンチ



第22トレンチ 第23トレンチ 第16トレンチ 第15トレンチ 第14トレンチ 第13トレンチ 第21トレンチ 第20トレンチ 第19トレンチ西端 第19トレンチ東端 第18トレンチ 第17トレンチ

1. 灰黒色土 (耕作土)
2. 暗灰黄色混じり灰黒色土 (1、3層の攪拌層)
3. 灰黄褐色砂質土 (耕作土)
4. 褐色混じり淡灰褐色砂質土 (耕作土)
5. 暗黄色混じり淡暗褐色砂質土 (耕作土)
6. 淡暗褐色礫混シルト
7. 灰褐色混じりにぶい暗黄褐色砂質シルト

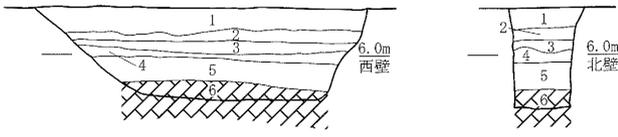
ON10-1、2、3区
第12トレンチ平面図および断面図

- 現代耕作土 (1層)
- /// 床土 (2層)
- 旧耕作土 (3層)
- ▨ 地山 (8層)
- 砂礫層 (谷地形埋土)
- 粘土層 (谷地形埋土)
- 砂層 (谷地形埋土)

ON10-1、2、3区層序模式図

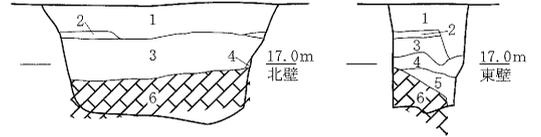


PL. 4 男里遺跡②、戎畑遺跡、岡中遺跡、兔田遺跡、楠畑遺跡調査区



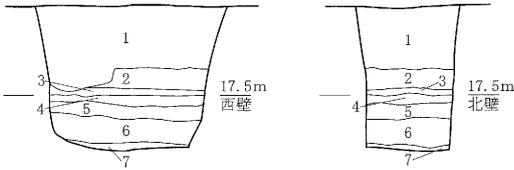
1. 淡灰黒色土（耕作土）
2. 橙色混じり淡灰褐色砂質土
3. 淡褐色砂質土（耕作土）
4. 褐色砂質土（耕作土、径5cm円礫少含）
5. 暗褐色礫混シルト（径10cm円礫、クサリレキ含）
6. 暗黄灰色礫混土（径30cm円礫多含、非常に硬く縮まる）

EB10-1区断面図



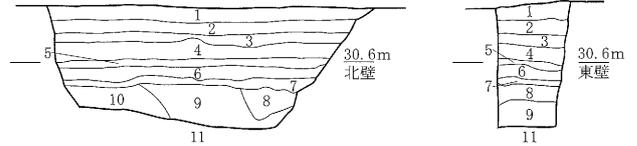
1. 淡灰黒色土（耕作土）
2. 暗橙色砂質土
3. 暗褐色礫混土（径5～20cm円礫多含）
4. 淡暗褐色礫混シルト（径2cm円礫少含）
5. にぶい黄褐色礫混砂質土（径2～10cm円礫少含）
6. 暗褐色礫

ON09-6区断面図



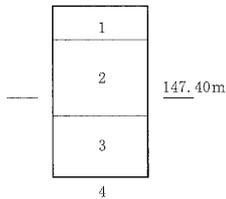
1. 盛土
2. 淡灰黒色土（耕作土）
3. 灰褐色混じり橙色土
4. 淡灰褐色土
5. 灰白色混じり暗黄色砂質土
6. 淡灰褐色混じり淡褐色土（耕作土）
7. 明黄色粘質土

US10-1区断面図



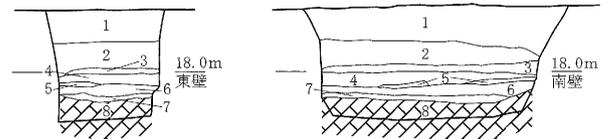
1. 盛土
2. 淡灰色土（耕作土）
3. 灰色混じり暗橙色土
4. 淡灰褐色土（耕作土、Mg粒沈着）
5. 淡黄灰色土
6. 灰褐色砂質土（耕作土）
7. 暗黄灰色砂質シルト
8. 暗褐色礫混粘土（径5cm円礫、クサリレキ少含）
9. 暗褐色礫混粘土（径25cm円礫多含）
10. 暗褐色粘質シルト
11. 褐色礫混土（径25cm円礫多含）

OK10-1区断面図



1. 淡灰黒色土（耕作土）
2. 暗黄色礫混土（盛土）
3. 淡青灰色粗砂（旧表土）
4. 青灰白色礫混粗砂（径30cm円礫多含）

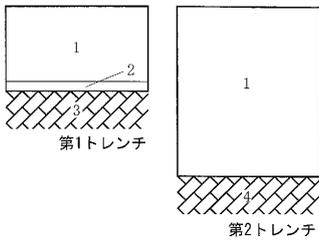
KS10-1区土層柱状図



1. 盛土①
2. 盛土②
3. 灰黄色土
4. 黄灰色砂質土（耕作土）
5. 淡灰褐色土（耕作土）
6. 暗黄灰色砂質土（耕作土、Mg粒多含）
7. 暗黄褐色混じり淡灰褐色砂礫
8. 淡灰褐色砂礫

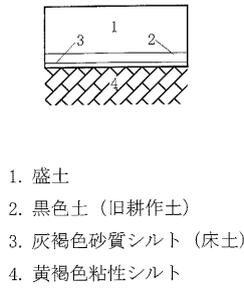
US10-2区断面図





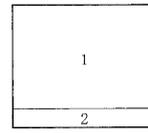
1. 盛土
2. 耕作土
3. 黄褐色粘性土
4. 青灰色礫混粘性土

試掘No.4区土層柱状図



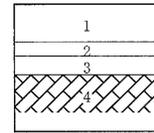
1. 盛土
2. 黒色土 (旧耕作土)
3. 灰褐色砂質シルト (床土)
4. 黄褐色粘性シルト

試掘No.3区土層柱状図



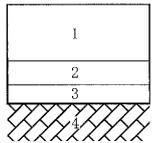
1. 盛土
2. 黒褐色粘土

試掘No.2区土層柱状図



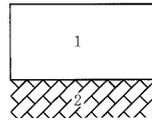
1. 橙黄色粘性シルト
2. 褐色粘性シルト
3. 暗褐色砂礫混粘性土
4. 灰褐色粘性土混砂礫

試掘No.1区土層柱状図



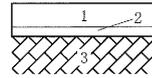
1. 盛土
2. 現代耕作土
3. 褐色マンガン混砂質シルト (旧耕作土)
4. 黄灰色粘性シルト

試掘No.8区土層柱状図



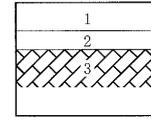
1. 盛土
2. 赤褐色～黄褐色礫混粘性土

試掘No.7区土層柱状図

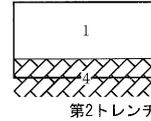


1. 灰黄色粘性土
2. 黒褐色マンガン混粘性土
3. 灰黄色礫混粘性土

試掘No.6区土層柱状図



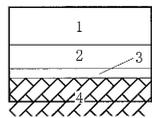
第1トレンチ



第2トレンチ

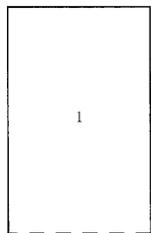
1. 盛土
2. 耕作土
3. 黄褐色礫
4. 黄褐色礫混粘性土

試掘No.5区土層柱状図

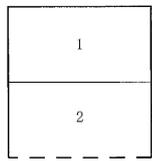


1. 盛土
2. 旧表土
3. 床土
4. 褐色礫

試掘No.12区土層柱状図



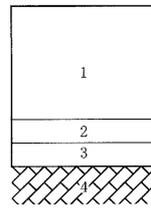
第1トレンチ



第2トレンチ

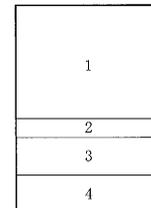
1. 盛土
2. 褐色粗砂 (海砂)

試掘No.11区土層柱状図

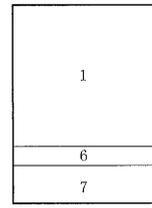


1. 盛土
2. 黄灰色粘性シルト
3. 灰褐色粘性シルト
4. 黄褐色粘性シルト

試掘No.10区土層柱状図



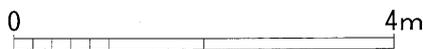
第1トレンチ



第2トレンチ

1. 盛土
2. 旧表土
3. 旧盛土
4. 暗灰色粗砂
5. 暗灰色砂礫
6. 灰色粘性土 (旧表土)
7. 灰黄色細砂
8. 黄橙色細砂

試掘No.9区土層柱状図





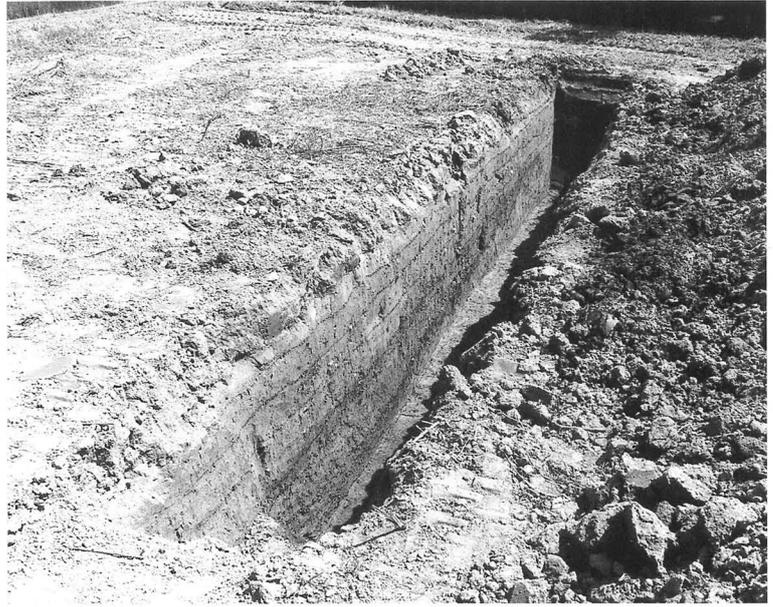
第1トレンチ
(南西から)



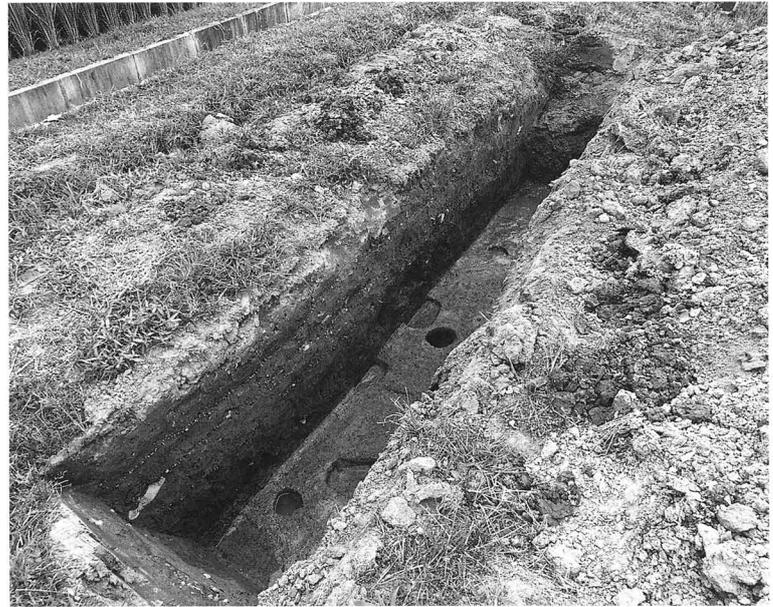
第2トレンチ
(南西から)



第5トレンチ
(南西から)



第8トレンチ
(南西から)



第12トレンチ
(北西から)



同上
(南東から)



第 15 トレンチ
(南西から)



第 19 トレンチ
(北東から)



第 21 トレンチ
(南東から)



ON 09-6 区
(南西から)



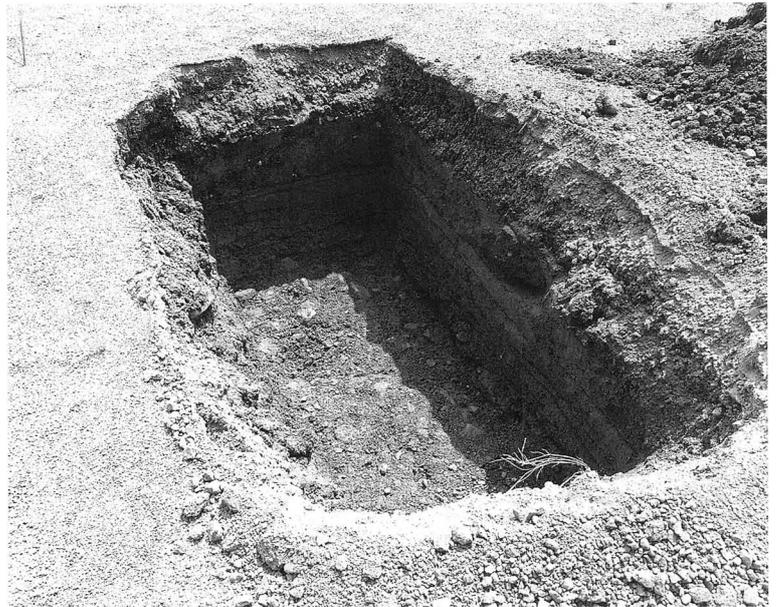
EB 10-1 区 第1トレンチ
(南東から)



OK 10-1 区
(南西から)



US 10-1区
(南東から)



US 10-2区
(北西から)



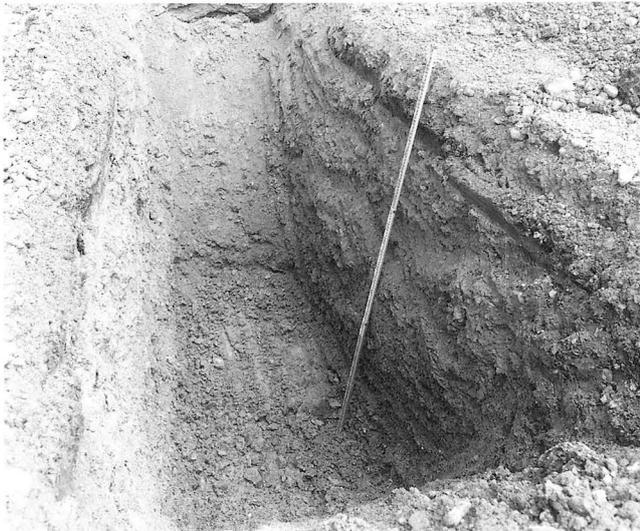
KS 10-1区
(北西から)



試掘調査No. 4区
第1トレンチ



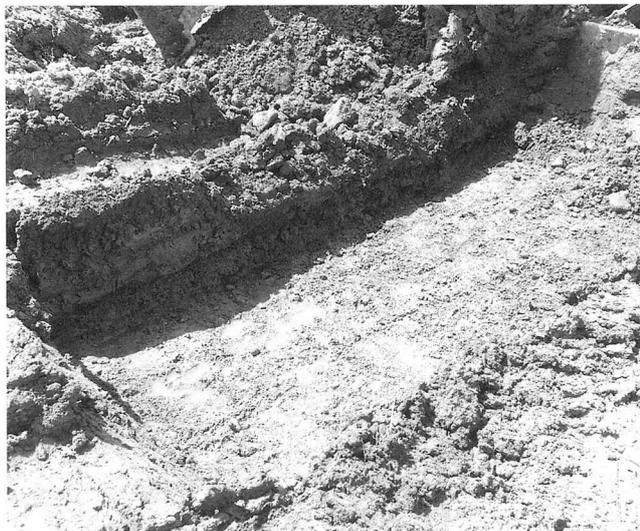
試掘調査No. 1区



試掘調査No. 5区
第1トレンチ



試掘調査No. 2区



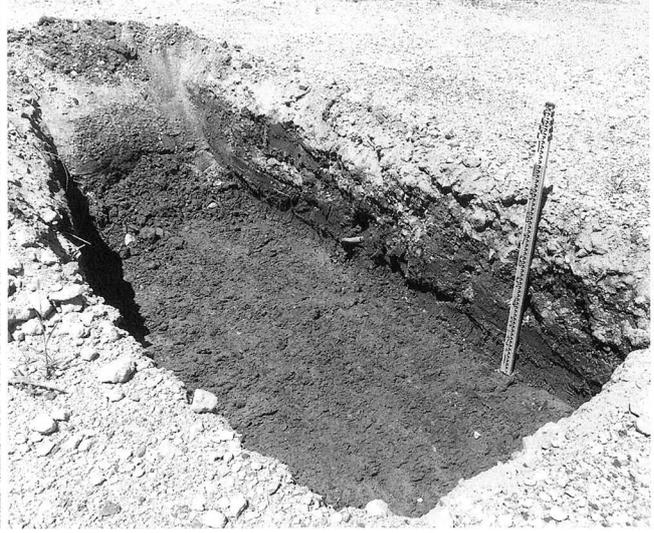
試掘調査No. 6区



試掘調査No. 3区



試掘調査No. 10 区



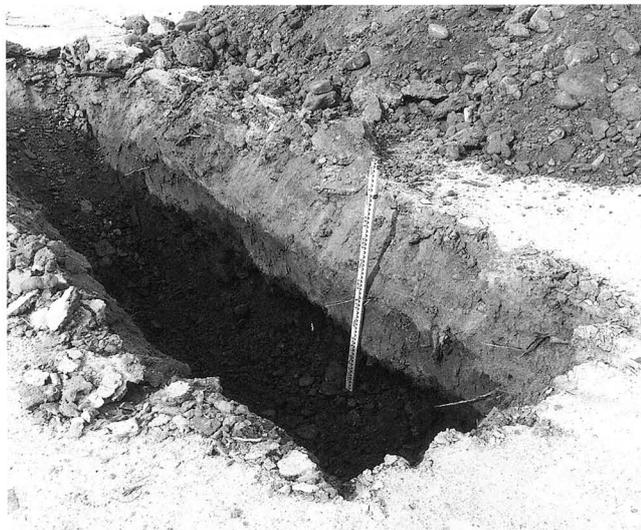
試掘調査No. 7 区
第 1 トレンチ



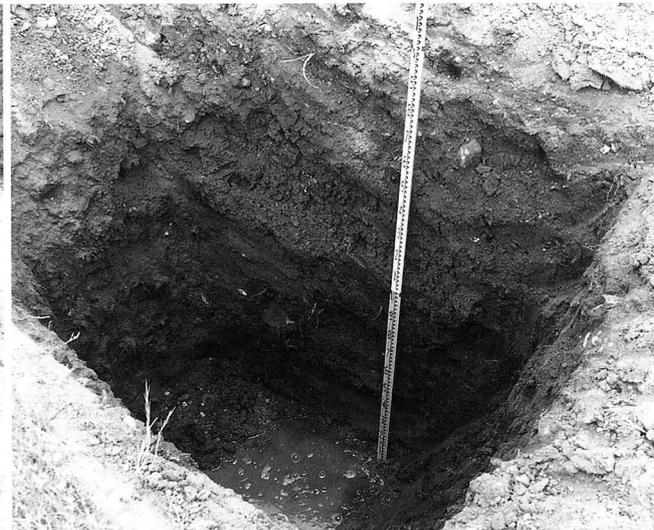
試掘調査No. 11 区
第 1 トレンチ



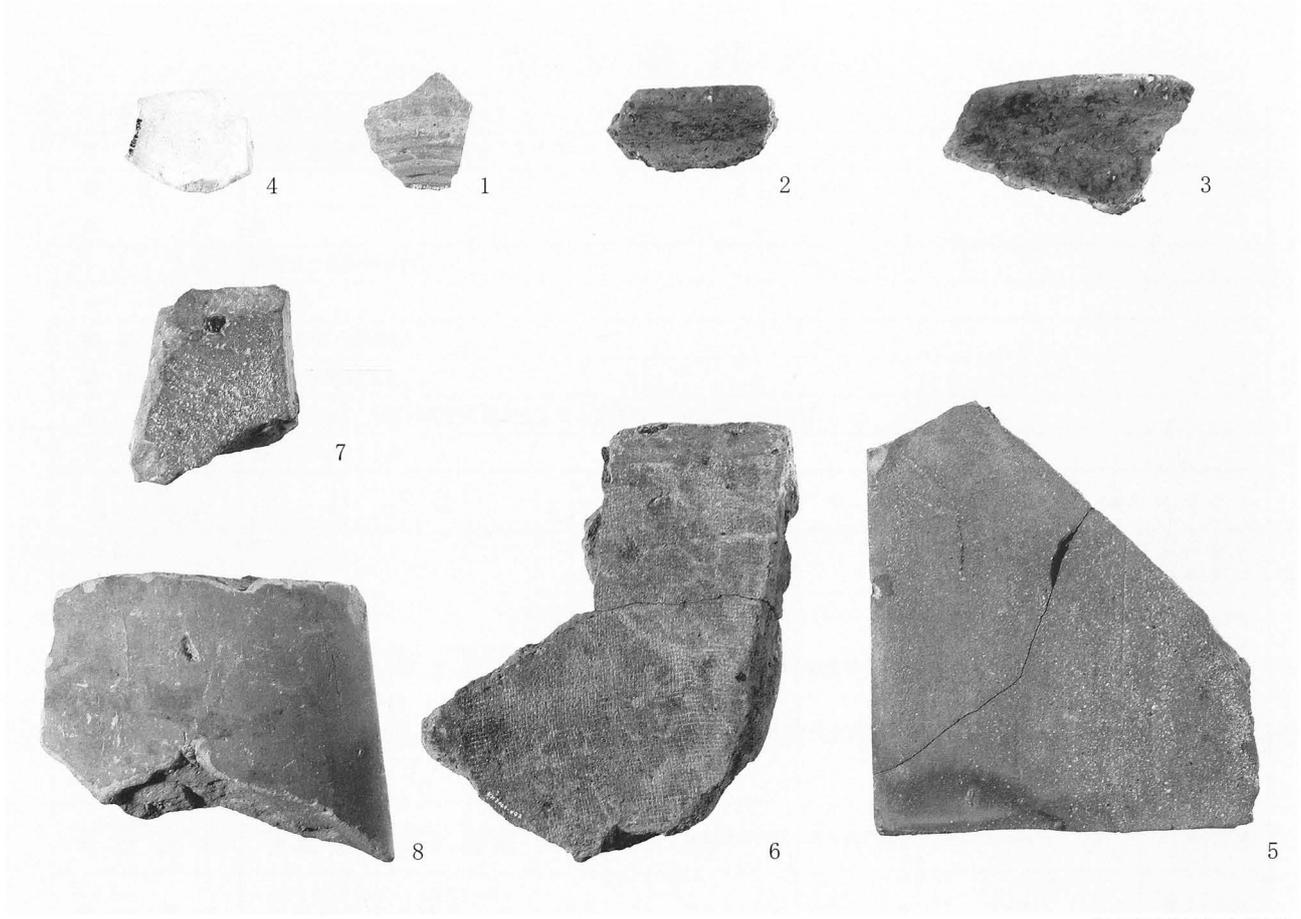
試掘調査No. 8 区



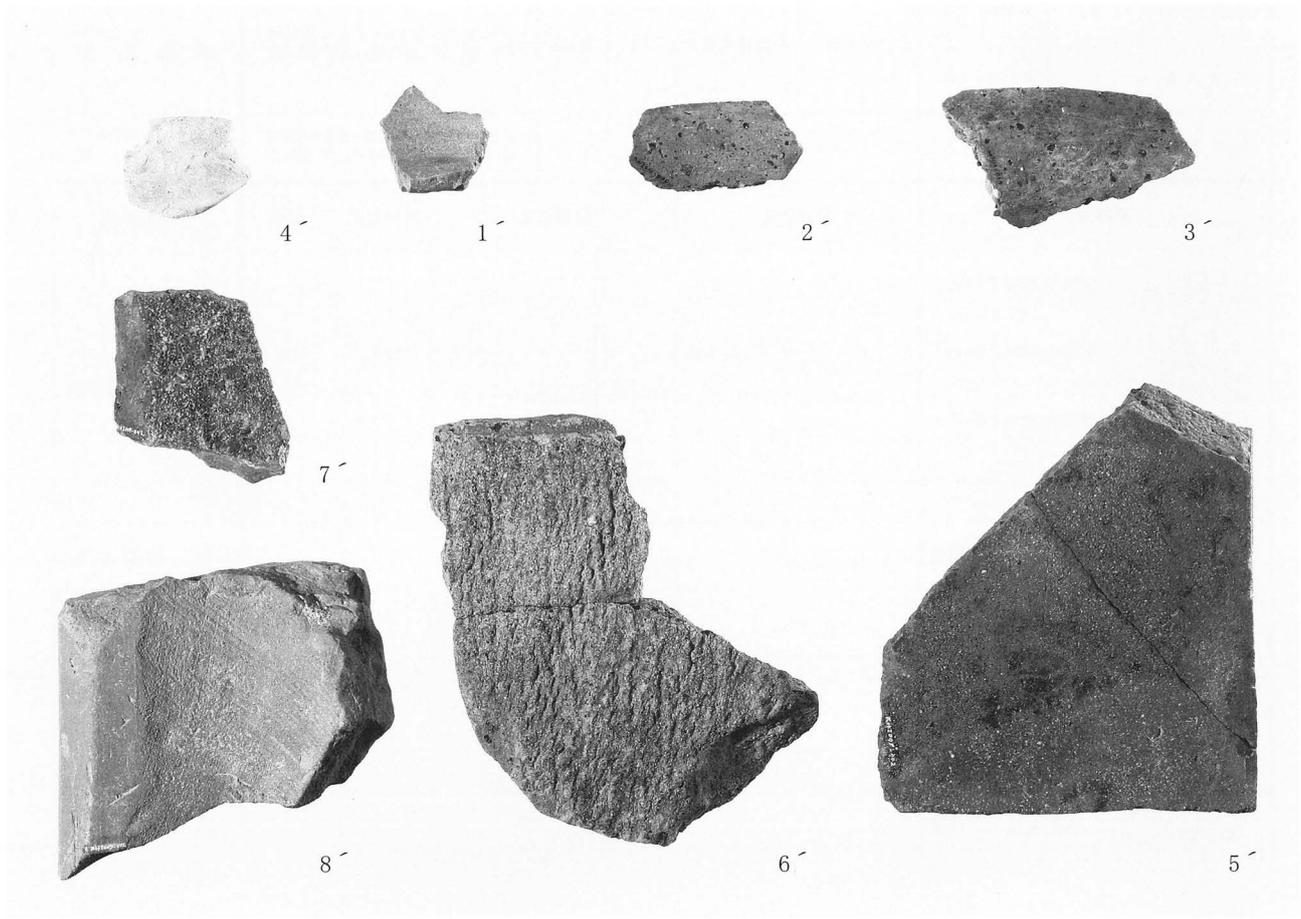
試掘調査No. 12 区
第 1 トレンチ



試掘調査No. 9 区
第 1 トレンチ



男里遺跡出土遺物



同上

報告書抄録

ふりがな	せんなんし いせきぐん はっくつちようさほうこくしょ 28							
書名	泉南市遺跡群発掘調査報告書 XXVIII							
副書名	-							
巻次	28							
シリーズ名	泉南市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第51集							
編著者名	石橋広和 城野博文							
編集機関	泉南市教育委員会							
所在地	〒590-0592 大阪府泉南市樽井1丁目1番1号 Tel.072-483-2583							
発行年月日	2011年03月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡					
おのさと 男里遺跡	おおさかふせんなんしおのさと 大阪府泉南市男里	27228	ON	34度21分41秒	135度15分30秒	10-1 201007	46	共同住宅 宅地造成
						10-2 201007	30	共同住宅 宅地造成
						10-3 201007	27	共同住宅 宅地造成
						09-6 201003	3	個人住宅
えびすばた 戎畑遺跡	おおさかふせんなんしたるい 大阪府泉南市樽井	27228	EB	34度22分07秒	135度15分28秒	10-1 201008	15	宅地造成
おかなか 岡中遺跡	おおさかふせんなんしんだちおかなか 大阪府泉南市信達岡中	27228	OK	34度21分00秒	135度16分27秒	10-1 201006	4	個人住宅
うさいだ 兔田遺跡	おおさかふせんなんしうさいだ 大阪府泉南市兔田	27228	US	34度22分36秒	135度18分27秒	10-1 201004	2	個人住宅
						10-2 201008	3	個人住宅
くすはた 楠畑遺跡	おおさかふせんなんしんだちくすはた 大阪府泉南市信達楠畑	27228	KS	34度18分55秒	135度17分51秒	10-1 201006	4	電話通信
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
男里遺跡 10-1 10-2 10-3 09-6	集落	古代	ピット		須恵器、土師器		大規模な流路を確認 大規模な流路を確認 大規模な流路を確認	
戎畑遺跡 10-1							遺構分布の南限を示唆	
岡中遺跡 10-1								
兔田遺跡 10-1 10-2							安定面の確認	
楠畑遺跡 10-1							初めての発掘調査	

泉南市遺跡群発掘調査報告書 XXVIII
泉南市文化財調査報告書 第51集

2011年3月31日

編集・発行 大阪府泉南市教育委員会

泉南市樽井1丁目1番1号

Tel. 072-483-2583

印刷 有限会社 ヌノタ印刷工房

泉南市新家4509-4

コスモヒルズ新家1-205号

Tel. 072-480-2760

